

應急手當法



始









47106  
443



應  
急  
手  
當  
法

大正  
3. 9. 10  
内交



### 應急手當法自序

應急手當法とは、急性病乃至外傷の突發に出會し、臨機措置するの方法なり。語を代ふれば、醫師の來るまでの手當なり。故に専門家たる醫師より見る時は、勿論平凡なる措置にして、功果又薄弱なるを免れず。然れ共應急手當法の本旨としては、功果薄弱なるよりは寧ろ後療に妨害あらむことを懼るゝと同時に、何人とも雖も容易に施し得るを要す。

如上の理に依り、手當方法藥品の如きは、平易簡便昂めて無害有効なる者を探擇せり。而して應急手當を施すときは、術者は精神を沈靜して、先づ手當の順序方法を熟



慮し、決して周章狼狽するなく、臨機應變の措置を爲さざるべからず。又應急手當法は、好んで施すべきものにあらず。責任者とし乃至人道上よりして看過し得ざる場合に際し、初めて施すを良とす。然らざれば若しも手當の結果にして不良となるか、或は他人の誤解を招く時は、反て不懣を感じることなきにあらず。例へば猥りに手當を施す時は、非醫師の行爲と誤られ、亦は治療の時期を失し、經過を不良となすこと之れなきにあらず。此の弊害は、著者の最も危憂する處にして、偏へに讀者の注意を冀ふ所以なり。

大正三年七月日射病患者の續發を聴きつゝ

著者誌

## 應急手當法目次

### 第一章 必要なる生理……………一

一、脈……………一

二、心臟音……………二

三、呼吸……………三

四、體温……………四

五、反射作用……………六

### 第二章 必要なる解剖(血管)……………六

一、肺動脈……………七

二、大動脈……………七

總頸動脈……………七



鎖骨下動脈……………八

股動脈……………九

靜脈管……………一〇

第三章 消毒方法……………一〇

一、消毒方法の種類……………一一

(イ) 理學的消毒方法(煮沸消毒、蒸氣消毒、乾熱消毒)……………一一

(ロ) 化學的消毒方法(昇汞水、石炭酸水、アルコホール、沃度丁幾)……………一二

二、消毒法……………一四

(イ) 手指の消毒……………一四

(ロ) 傷部の消毒法……………一五

(ハ) 器械類の消毒……………一五

(ニ) 繃帶材料の消毒……………一五

第四章 藥品……………一六

一、外用藥……………一六

(イ) 石炭酸水……………一六

(ロ) 昇汞水……………一七

(ハ) アルコホール……………一八

(ニ) 沃度丁幾……………一九

(ホ) 硼酸末……………一九

(ヘ) デルマトール……………一九

(ト) グリセリン坐藥……………二〇

(チ) コカイン水……………二〇

(リ) 芥子……………二〇

(又) 十%イヒチオール軟膏……………二一



第五章

内用薬

(イ) エーテル精一名ホフマン氏液……………二二

(ロ) 赤酒……………二二

(ハ) 健胃止瀉散……………二二

(ニ) 薄荷油……………二二

(ホ) 臭素ナトリウム……………二三

(ヘ) アスピリン錠……………二三

(ト) 大黃末……………二三

(チ) 驅蟲劑……………二四

(リ) 歯痛薬……………二四

(又) 白糖……………二五

器械類……………二五

第六章

器械類

(イ) 膿盆……………二五

(ロ) 剪刀……………二五

(ハ) ピンセット……………二五

(ニ) スポイト……………二五

(ホ) 検温器……………二五

(ヘ) 氷嚢……………二五

(ト) 舌圧子……………二五

(チ) 桿秤……………二五

(リ) 匙……………二六

(又) 薬包紙……………二六

(ル) メートルグラス……………二六

繙帯材料……………二六



イ) 繃帯……………二六

ロ) ガーゼ……………二六

ハ) 脱脂綿花……………二六

ニ) 油紙……………二六

ホ) アマニン油紙……………二六

ヘ) 絆創膏……………二七

**第八章 人工呼吸法**……………二七

一、初生兒人工呼吸法……………二七

二、大人人工呼吸法……………三〇

**第九章 内科的疾**……………三五

一、芥子泥使用法……………三五

二、罨法、A 温濕潤罨法、B 乾温罨法、C 冷罨法、D ブリスニツス氏罨法……………三五

内科的疾各論……………三七

一、急性腦貧血……………三七

二、急性腦充血……………三九

三、假死と眞死との別……………四〇

四、日射熱と熱射熱……………四一

五、熱性諸病……………四三

六、頭痛……………四五

七、急性胃腸カタル……………四五

八、腹痛……………四七

九、胃痛……………四七

十、神經痛……………四八

十一、鼻出血……………四九



(八)

十二、咯血……………五〇

十三、吐血……………五二

十四、咯血と吐血との別……………五三

十五、下血……………五三

十六、齒齦出血……………五四

十七、齒痛……………五五

十八、虚脱……………五六

十九、昏睡(人事不省)……………五七

二十、痙攣……………五七

二十一、癲癇……………五八

二十二、脳震盪症……………六〇

二十三、急性脳膜炎……………六一

二十四、心臟摩痺……………六一

二十五、喘息……………六三

二十六、溺死……………六四

二十七、縊死及絞殺……………六六

**第十章 中毒**

一、急性アルコール中毒……………六七

二、メチールアルコール中毒……………六八

三、フォルマリン中毒……………七〇

四、炭酸瓦斯中毒……………七〇

五、重クロム酸中毒……………七一

六、慢性鉛中毒……………七二

七、殺鼠劑中毒……………七三



八、石炭酸中毒……………七四

九、昇汞中毒……………七四

十、肉類中毒……………七五

十一、酸類中毒……………七六

**第十一章 繃帶術**……………七八

一、卷軸帶使用法……………七八

    A 折轉帶……………七九

    B 交叉帶……………七九

    C 人字帶……………七九

    D 頭部繃帶……………八一

    E 偏眼帶……………八二

二、三角巾用法……………八二

頭部四帶脚……………八三

三、副木繃帶……………八三

**第十二章 外科的疾病**……………八六

外科的疾病各論……………八六

一、火傷及温傷……………八六

二、凍傷……………八八

三、電擊……………九〇

四、創傷……………九一

五、銃傷……………九三

六、出血並に止血法……………九四

七、異物摘出法……………九九

八、毒蟲類の咬刺傷……………一〇二



九、犬の咬傷……………一〇二

十、骨折……………一〇三

十一、脱臼……………一〇四

十二、捻挫……………一〇七

## 第一章 必要なる生理

(一) 脈 脈は動脈管に於て觸知するものにして、就中表在動脈管に於て明なり。普通吾人は臑骨動脈(拇指側手腕關節を距る約一寸)を檢脈部とす、時としては耳後動脈(耳翼の直後)又は顛顛動脈(俗に米かみ頭痛膏をはる處)にて檢脈する必要あることあり。

脈數 脈數は個人若くは年齢其他運動精神状態により差あり、概して初生兒の脈數は一分時百二三十至、二三才の小兒は百至内外、五六才の者は九十至内外、小學に登る頃は八十至内外を普通とす。壯年者は七十五至を普通とするも年齢の長するに従ひ、七十乃至六十至に減するを常とす。

生理的(病ならざること)にして、脈數の比較的多き者あり、少なき者ありて一様ならず。故に吾人は健康時に於て脈數を測定し、病時の参考とせざるべからず。



らす。

(二)

**脈の性質** 心臓の收縮により、動脈血を血管内に壓出するに當り、起る波動を脈と謂ふ。健康なる脈とは其力適當に強く、指腹を以つて軽く壓迫を試むる時は反撥の感あり。而して秩序整然なるも、若し不規則にして強弱不同結帶するか、或は細致にして觸知し難く緩徐なるは病的脈なり。併し生理的に結帶脈ある者あり注意すべし。

(二) **心臓音** 心臓音は左胸乳房下に聽取する音なり、此の音は心臓收縮時と擴張時に發する兩音あるも、主として收縮時の音を聽くべし(心尖音とも謂ふ)。

**音數** 音數は脈數と一致す、若し心臓音幽微となり聽取困難となれば頻死の徴にして、假死者の心臓音は幽微なりと雖ごも必ず存在す。

**心尖搏動** 心尖搏動は、心音聽診部に於て、第五第六肋間乳線(乳房を貫き縦に引きたる假線)部に於て目睹し得べき搏動なり。此の搏動は普通辛ふじて

認め得る位なるが、劇運動・心臓瓣膜病・神經性心季亢進・其他病的として著名となる。心尖音と脈數は一致するを常とす。

(三) **呼吸** 呼吸は吸酸排炭の作用にして、瓦斯交換は肺胞毛細管にて營まる。

**呼吸數** 大人安靜時の呼吸數は一分間十六七回とす。併し肺に病あるか、若しくは脈數増加の原因ある時は、呼吸又増加するを普通とす。概して幼年者は壯年者より呼吸數多く、壯年者より老年者は少なし。

**呼吸測定法** 胸腹部を露出し、胸廓の運動を注視する時は測定し得べし。又手掌を貼して數ふるも可なり。一般に婦人は胸式呼吸を、男子は腹式呼吸を營むにより、此の部にて測定するを便とす。

假死者は呼吸の有無を知るに困難なり、斯る時は細心注意して胸廓運動の有無を検し、若しくは口鼻に鏡を懸して曇りの有無を見、又は燭光を近づけて火焰の運動を見る、即ち焰尖の外方に靡き又は内方(口鼻の方)に傾くは呼吸作用ある



の證なり。併し此法は無風の時細心注意して試みざるべからず、故に實際上には不確實ならむ。

(四)

### 頻死呼吸

頻死に逼る時は呼吸の變態を來す、シャイテーストック氏呼吸と云ふ、初め呼吸頻數淺小となり、次で緩慢となり、更に頻數淺小となるを云ふ。

### (四) 體温

身體組織の酸化作用により發する温を體温と云ふ。故に酸化作用旺盛なる小兒の如きは、體温高く老人虚弱者婦人の如きは概して體温低し。

### 體温の高低

日常に於ける大人の體温は、腋下温三十七度を標準とするも實際は此の以下なる者多し。幼年者は三十七度以上の者あり、十七八才の男子に在つては三十七度内外、三十才頃の者は三十七度以内の者多し。老年者は三十六度内外を普通とす、婦人殊に肥満したる者は、壯年者と雖ども三十七度に達せざる者多し。

要するに體温は個人により一定せず。檢温器又正確なる者少なし、故に吾人は

日常に在つて同一檢温器を用ひて、一定時間十分乃至十五分腋下に於て測定し健康體温を測定すべきこと前の脉搏の如し。

### 檢温器使用法

檢温器は使用に先ち、乾燥せる柔軟なる布片を以つて清拭し、上部を把持して適當に打振り、以つて水銀柱を下降せしむべし。次で腋下は豫め布片類を以つて擦拭し、水分を(汗)去るべし。然らざれば水分の爲め水銀柱の示度を阻害するものなり。

### 體温測定の部位

腋下を普通とす、而して注意すべきことは皮膚面と水銀部と密接せしむるを要す。然らざれば水銀部を腋窩の空洞に遊離せしめ、感温せざることあり。特に患者老人の如く骨立したる者は最も此點に注意すべし。檢温器を永く固持せしむるは、患者の苦痛とする處なり。故に可成臥位を取らしめ、下位となりし腋下に挿入せしむるか、或は挿入後手を胸前に持たしめ、或は側方より押壓介補すべし。時として腋下檢温の不可能なることあり、斯る

必要なる生理

(五)



時は股間若くは肛門にて検温すべし、但し肛門の時は五分を減すべし。

**体温の増減** 運動取食等は一時体温上昇す、熱性病にて体温四十度以上の者は危険とす。之れに反し体温の下降は大出血虚脱衰弱飢餓飲酒者に多し。

**(五) 反射作用** 運動知覺の中樞は、腦脊髓神経系中にあり。光線刺戟にて瞳孔縮小し、鼻粘膜の刺戟は「くさみ」を起し、寒冷は皮膚血管の收縮を來して皮膚蒼白色となる。膝蓋腱を輕打する時は、下腿の反射的運動を來すが如し。反射作用の存在は、假死者に於て未だ中樞神経の生存を證するものなるにより、之れに因り真假死を區別し適當措置を施さざるべからず。

## 第二章 必要なる解剖(血管)

應急手當法に於て必要なるは、尿管の経路を知るにあり。就中最も必要なるは動脈なり。靜尿管は動脈管より比較的表在するを常とし、従而外傷を受くること多か

るべきも、出血すること少なく、患者に危険を及ぼすこと少なし。且つ靜尿管は動脈管と並行するにより、以下専ら動脈管に付て記載すべし。

大なる動脈管を傷づくる時は大出血を來し、急性貧血を來す。併し小血管特に毛細管出血の如きは、放置するも血管壁の收縮血液凝固に因る栓塞にて、自然的に止血するを常とす。

**動脈管** 心臟より起る動脈管に二條あり、一を肺動脈二を大動脈と云ふ。

**一、肺動脈** 肺動脈は心臟の右室より起り、進んで左右二枝となり、右枝は右肺に、左枝は左肺に分布し、終に肺胞毛細管となり、吸酸排炭の作用により、動脈血となる(肺動脈血は其の實靜脈血にして老廢物を含む)。

**二、大動脈** 大動脈は心臟の左室より起り、稍々上行して灣曲し、大動脈弓を作り、更に下行して脊柱の前側を行走し、第四腰椎部に至り股動脈となる。

**總頸動脈** 大動脈弓より分岐する大なる血管にして、頭及頸の前方に分布す、



大動脈弓より分岐する本管は、氣管の側方を上り、甲狀軟骨の上縁と一致せる部に於て分岐し、内及外頸動脈の二枝となる。

(イ) 外頸動脈 腦及眼球を除き頭部顔面並に前頸部に分布する動脈管にして、下顎枝の後側を上り下顎關節の後側に於て耳後動脈を分岐し、夫れより少しく上方に於て内頸動脈・横顔面動脈・淺顳顬動脈を出す。

(ロ) 内頸動脈 此は眼球、腦、前頭に分布する動脈にして咽頭の側壁に沿ふて上行し頭蓋腔に入る。

鎖骨下動脈 上肢に分布する動脈の主幹にして大動脈弓より分岐し進んで腋下動脈となり、更に上膊動脈となる。

(イ) 腋下動脈 第一肋骨の外様より腋窩の下境に互り、始め胸壁に接して下り終に上膊動脈となる。

(ロ) 上膊動脈 上肢内側(二頭膊筋)を下り、肘關節部に於て尺骨及橈骨動脈の

二枝となる。

(ハ) 橈骨動脈 此に肘窩より橈骨莖狀突起に至る假線に一致し檢脈に便なり。

(ニ) 尺骨動脈 肘窩より尺骨莖狀突起に向ひ弓形に走る。

(ホ) 骨間動脈 尺骨動脈の上端に於て分岐し、尺橈兩動脈の中間を深く走る。

股動脈 鼠蹊靱帶(上腿と腹壁との境界部にして内股の上界をなす)の中央より膝關節内縁に引きたる假線に一致して下行し、大腿中央に於て筋間中に隠る股動脈よりは左の分枝を出す。

(イ) 膝膕動脈 膝膕窩の中央を殆んど鉛直に下る本動脈は勿論股動脈の本幹なり。

(ロ) 前脛骨動脈 膝膕動脈より起り、下腿外側の稍々前方を下り、足附關節の前中央部に引きたる假線に一致す。

(ハ) 後脛骨動脈 膝膕窩中央より内顆に引きたる假線に一致するも素より筋肉



中に潜在す。

### (二) 腓骨動脈

後脛骨動脈の分枝にして深く筋間にあり。

### 靜脈管

靜脈管は血液の還流管にして、經路は常に動脈管と並行し損傷を受くることあるも出血すること動脈の如からず、時として空氣を吸引し空氣栓塞を來し即死することあり注意を要す。

### (附) 動脈出血と靜脈出血との區別

動脈血は其の色鮮紅色にして凝固性强し。且つ血壓により線狀に迸出するも、靜脈血は其の色暗紅色凝固性弱く線狀に迸出することなし。

## 第三章 消毒方法

外科的疾患の應急手當を行はんと欲せば、第一に消毒方法の嚴密なるを要す。然らざれば反而經過を不良ならしめ、患者の不幸を招くことあり。

消毒方法は、主として化膿菌丹毒菌破傷風菌等を殺菌して、併發症なからしむるを目的とす。而して右病原菌は最も抵抗力強きにより、特別注意を以つて消毒せざるべからず。

### 一、消毒方法の種類

分ちて二種とす、一は理學的消毒二は化學的消毒之れなり。

#### (1) 理學的消毒

日光消毒・煮沸消毒・蒸氣消毒・乾熱消毒之れに屬す。併し外科的治療に在つては、日光消毒を應用することなく、専ら煮沸乾熱蒸氣の三種を應用す。

(A) 煮沸消毒 被消毒物を三十分間以上浸漬煮沸するにあり、之れに適する者は金屬性器械硝子製物縋帶材料等なり。

(B) 蒸氣消毒 熱蒸氣(攝氏百度以上)を以つて一時間以上消毒するにあり。之れを行ふには消毒器を要す。此の消毒器は「シムメルブッシュ」の簡易なる消毒



器を良とす。被消毒物としては布帛類特に繻帶材料を主とす。

(C) 乾熱消毒 専ら繻帶材料、特にガーゼ脱脂綿花を消毒するに便なり。本消毒も又一定の装置を要す。併し本法は物品を濕潤せざるを以つて便利なるも、物質を毀損するを不利とし、利害よりすれば蒸氣消毒に及ばず。

(D) 化學的消毒 一定藥品を以つて消毒するものにして、外科的治療にも應用すること多し。今應急手當上至便なる者は昇汞水石炭酸水「アルコホール」沃度丁幾類とす。

(A) 昇汞水 手指消毒には千倍液にし可なるが、傷部の消毒には二千倍より三千倍液を使用す。昇汞水は金屬を腐蝕するにより、金屬性容器に入れ又は同製器具の消毒に用ふべからず。

昇汞水は「ガーゼ」脱脂綿花の如きは、之れに浸漬して後適當に壓搾して濕布繻帶とし處置する時は、消毒消炎の二作用を兼備す。

(B) 石炭酸水 普通二十倍とし手指器械類の消毒に用ひ、三十倍乃至五十倍液は傷部の洗滌又は濕布繻帶等に適す（膿原液三十倍以上は濕布に用ふべからず何んとなれば皮膚の腐蝕を起すことあり。）石炭酸水は今や民間にて使用するに至り極めて便利の消毒薬なり。

(C) 「アルコホール」 二種あり、一を通常酒精（燈火用又同じ。）二を無水酒精（純酒精）とす。無水「アルコホール」は其のまゝにては消毒力なし、仍つて等分に水を加ふる時は消毒力強大となる。

通常酒精は元より水を含有するにより、其のまゝにて消毒力有るも、約三分一の水を加へたるものは消毒力大なり。

酒精水は皮膚の消毒器械類及濕布繻帶卷法等に用ひ、極めて便利有力なる消毒薬なり。

(D) 沃度丁幾 日本局方沃度丁幾は酒精十二分沃度一分よりなるにより、幼弱



なる皮膚に用ふる時は皮膚の剝脱を來す。消毒に用ふる沃度丁幾は、更に三分一の酒精を加へ稀釋すべし。  
沃度丁幾は消毒の外之れを炎症部に塗布して消炎法とし、又は傷部周圍及腫物等に塗りて其の部を消毒す。

## 二、消毒法

(イ) 手指の消毒 傷部に觸るゝ必要ある時は、豫め手指を消毒すべし。事情の許す時は温湯及石鹼にて丁寧に洗滌し、殊に爪は短截して後綿密に洗淨せざるべからず。次で消毒薬にて消毒す、而して絶対に未消毒の布片類にて拭ふことなく、若し拭ふ必要あらば一度消毒したる布片類ならざるべからず。且つ一旦消毒したる手指は未消毒物に觸れざるを要し、誤つて觸れたる時は更に消毒すべし。

沃度丁幾を手指に充分塗布し、自然乾燥を俟つ時は充分なる消毒となる。酒精

を用ふる亦同じ。

(ロ) 傷部の消毒 傷面にして不潔ならざれば、消毒せざるを良とす。若し不潔

ならば、三四十倍の石炭酸二三十倍の昇汞水にて洗滌し、後繃帯を施すべし。

擦過傷の如きものは稀釋消毒薬にて濕布繃帯をなすか、或は「デルマトール」を撒布し、時としては「イヒチオール」軟膏絆創膏等を貼布す。

擦減傷には濕布繃帯を施すべし。

(ハ) 器械類の消毒 金屬製器械例へば剪刀「ピンセット」の如きは、二十倍石

炭酸水若くは酒精水に浸すこと數分間なるべし。時としては如上藥品にて擦拭することあり、若し消毒薬なき時は、鐵瓶鍋等にて煮沸するか若くは火中にし熱するも可なり。

(ニ) 繃帯材料の消毒 直接に傷部に當つる「ガーゼ」脱脂綿花の類は、消毒薬

に石炭酸水「アルコホール」水浸し、時としては乾熱消毒と爲すべし



薬店にて販賣する「ガーゼ」脱脂綿花の類は、既に消毒せられありし差支なきものと信するも大なる誤解なり。故に使用時は必ず毎回相等の消毒を行はざるべからず。

## 第四章 薬 品

多くの薬品中には猛毒なるありて、之れが用量保存等を誤る時は不慮の危害を招くものなり。故に薬品は醫師藥劑師藥種商の外取扱を許さざるなり。但し普通薬にして危害少なき者は素人と雖ども買受をなすことを得。

應急手當法中に列記せしものは、普通薬を主とし、劇薬は勉めて使用せざるの方針を取れり。従つて處方の平凡にして奏効遅々所謂隔靴搔痒の症あるは素より覺悟せざるべからず。應急手當法中用意すべき薬品は分ちて外及内用の二とす。

### 一、外用薬

(イ)石炭酸水 消毒薬にして局方にては劇薬とす普通二十倍液を用ふ。(買受證ヲ要ス)

調製法 結晶しある石炭酸は栓を抜き瓶を温湯中に入れ溶解するを俟ち、一分に微温湯十九分を加へ攪拌する時は透明となる(二十倍以内の者は透明とならず)。溶解石炭酸百分に水十分を加へたる者は流動性を保ち使用に便なり

應用 石炭酸水は手指器械の消毒に適し、三四十倍に稀釋したるものは傷部の洗滌濕布繃帯に良し。

注意 石炭酸の濃厚なる者は腐蝕作用あり、若し腐蝕したる時は速かに水にて洗去し次で「アルコール」「グリセリン」を能く塗布すべし。本薬は常に三百グラム位を用意すべし

(ロ)昇汞水 消毒薬にして藥局方中の毒薬なり。普通千倍液を用ふるも傷部消毒には三千乃至四千倍を用ふ。



**調製法** 昇汞は白色光輝ある針狀結晶なり。千倍昇汞水を製するには、昇汞一匁に水四千「グラム」(水二升二合)を加へ、丁寧攪拌し全く溶解するを待つべし。昇汞水は水と誤認され易し故に、赤色素を加へ區別すべし。

**應用** 昇汞水は消毒力強し故に手指傷部排泄物の消毒に用ふ。(買受證ヲ要ス)

**注意** 昇汞は醫師の證明により買ふべし。

昇汞水は光線を避け陶磁器製の器に容れ覆蓋をなし貯ふべし。

**昇汞錠** 藥局方の者は一ケに付〇・五「グラム」の昇汞を含む、故に水一升強に四ケを溶かす時は、千倍液を得極めて便利なり。

(八) **通常「アルコホール」** 普通藥にして消毒力強し、本藥は諸種の消毒に適するのみならず少量は興奮藥となる。

**調製法** 「アルコホール」二分に水一分を加へ消毒に用ふ。

**注意** 本藥は密栓して貯ふべし。

(二) **沃度丁幾** 局方の劇藥なり併し賣藥とせしものあり。(買受證ヲ要ス)

**應用** 打撲部又は發炎疼痛ある部に塗布する時は鎮痛諸炎の効あると同時に消毒作用あり。

**注意** 密栓して貯ふ。

(ホ) **硼酸末** 普通藥なり粉末のものを便とす。

**應用** 粉末のまま、傷部に撒布し、又は3%の水溶液となし洗眼料とし、或は濕布繃帯として用ふ、但し溶解するに温湯を良とす。(％プロセント又はパーセントと謂ふ百分のことなり)

**注意** 瓶中若しくは藥袋に容れ貯ふ。

(ヘ) **「デルマトール」** 黄色粉末普通藥なり。

**應用** 防腐收斂性あるを以つて傷部に撒布す、止血には最も多量を撒布し、壓定繃帯を施す。



一般下痢に用へ止痢の効あり、小兒一回〇・五大人一回一・〇以上一日數「グラム」を用ふ。(一グラムは一匁目の約四分一に當る)

注意 藥袋若くは瓶中に貯ふ。

(ト)グリセリン坐藥 大人用小人用とあり普通藥なり。

應用 排便の目的にて肛門に差入れ、一定時を経る時は自然的に溶融し便通を來す極めて便利なり。

注意 瓶中若くは罐中に入れ可成溫熱を避け貯ふ。

(チ)ココカイン水 劇藥なり通常五十倍液に作り點眼瓶中に貯ふ。(買受證を要す)

應用 眼内異物の迷入差明疼痛其他齒痛に鎮痛藥として用ふ。

注意 古き者は交換すべし。

(リ)芥子 日本及外國の者何れにても可なり。普通芥子泥として用ふ。

芥子泥製法 芥子末に溫湯を注ぎ泥狀となし用ふ。

應用 引赤刺戟性誘導の目的を以つて芥子泥を紙又は布片に延し、局所に粘

附す、作用強き時は「メリケン」粉を加へ加減すべし。

注意 瓶中に密栓し、若しくは藥袋中に納め、古きものは交換すべし。

(又)十%の「イヒチオール」軟膏 普通藥なり。

應用 腫物濕疹の外皮膚病、火傷、凍傷、擦過傷、打撲痛等汎く用ひらる。

## 第五章 内用藥

(イ)エーテル「精一名」ホフマン「氏液」

本藥はエーテル一分酒精三分を混加し製す、普通藥なり。密栓して貯ふべし。

應用 吸入藥とし又興奮藥として用ふ、小兒には一回に數滴を水或は白糖に加へて與へ、大人ならば十數滴を與ふ。例へば虚脱失神に用ひ、鎮痛藥としては胃痛嘔吐に、時としては日射病患者の皮膚に塗擦することあるべし。



注意 揮發性强し故に密栓して貯ふ。

(□) 赤酒(上等葡萄酒) 一本一圓以下の者は不純なり。

應用 興奮薬として急性腦貧血、虚脱其他脉の不良なる場合に與ふ。

之れを水に加へ或は其のまゝ一回五グラム以上三十瓦位を與ふ、少量は効なく多量は摩酔すべし。

(ハ) 健胃止瀉散 重曹三・〇ケンチア末〇・五、次硝酸蒼鉛一・〇を加へ混加し、

其の一・〇を大人一回量とす。小兒は半量若しくは三分の一量とす。

應用 下痢、胃痛、腹痛、嘔吐、悪心に用ふ。

注意 劇薬ならざるにより、大量を與ふるも可なり。本品は瓶若くは藥袋中に貯ふ。

(ニ) 薄荷油 普通薬なり、販賣する者は酒精を加へ稀釋しあり。

應用 清凉又は興奮の意味にて水に加し用ふ、外用には頭痛神經痛日射病に

塗布し、内用には腦貧血日射病食傷嘔心嘔吐眩暈に用ひ、齒痛の時齒腔に綿花に浸し充填することあり。

(ホ) 臭素「ナトリウム」 白色小結晶潮解するの性ある普通薬なり。密栓して貯ふべし。

應用 鎮靜薬にして一般頭痛神經痛其他神經の鎮靜を欲する場合に用ふ。

小兒は一回〇・三乃至一・〇以内、大人は一回一・〇以上二・〇、一日數瓦を水に溶解して與ふ、多量なる時は催眠作用あり、但し有熱者には用へざるを良とす。

(ヘ) アスピリン錠 普通薬なり少しく滋味ある白色粉末なり。

應用 解熱鎮痛作用あり、鎮痛には小兒一回〇・三以内大人〇・五以上一・〇以内を頓服とす、寒冒「ロイマチス」神經痛肋膜炎其他一般の解熱に用ふ。

(ト) 大黃末 古來より知られある普通薬にして、少量は健胃となり多量は下劑となる。



應用 下劑としては、小兒に〇・二以内大人〇・五以上を用ふ。例へば便秘による頭痛腹痛腦充血に誘導薬として用へ催下劑とす。

(チ)驅虫劑、(甘汞サントニー子合劑) (サントニーネは劇薬なり)

製劑サントニー子一〇・〇甘汞一〇・〇乳糖一〇・〇を混加し製す。

應用 下劑の目的に或は驅虫の目的に用ふ。

小兒一回〇・二乃至〇・四以内大人一回〇・五以上一〇迄を與ふ。

腹痛、頭痛、發熱、痙攣、食傷、悪心、嘔吐、便秘等に用ふ。

注意 小兒の病むや何病を論せず先づ本劑を與ふべし。左なくとも健康時に在つて、毎月一回定日に内服せしむるは極めて必要なことなり。

(リ)齒痛藥 オレーフ油若くは丁香油一〇・〇に石炭酸五滴乃至十滴を加へ時と

しては更らに沃度丁幾五滴位を加へ、振盪劑とし錦球に浸し齒腔に充填す。

應用 用時振盪す、充填する齒腔内不潔物を去り、後錦球を軽く挿入し咬ま

しむ一回にて止痛なき時は再三錦球を交換すべし多くは止痛す。

(又)白糖 調味として用ふ、但し用意せざるも可なり。

## 第六章 器 械 類

(イ)珐瑯引膿盆 消毒盤となし又は洗滌の際受器となす。

(ロ)剪刀 繃帶材料を截るに用ふ。

(ハ)撮子 異物摘出藥品挿入其の他適宜に用ふ。

(ニ)「スポイト」 洗眼洗滌に用ふ。

(ホ)檢温器 體温檢測に用ふ。

(ヘ)氷嚢 冷器法に用ふ。

(ト)舌厭子 咽頭検査に用ふ。

(チ)桿杵 藥品の料量に用ふ。



- (リ) 匙 薬品取扱に用ふ。  
(又) 薬包紙 薬品を分包に用ふ。  
(ル) 「メートルガラス」 水薬計量に用ふ。  
右之外臨機必要なるものは附近民家に於て辨すべし、要するに應急措置は頓智を以つて施すべし。

## 第七章 繃帶材料

- (イ) 繃帶 繃帶を施すべき部位により適宜行ふべし。  
(ロ) ガーゼ 傷部包護用とす。  
(ハ) 脱脂綿花 同上  
(ニ) 油紙 洗滌時其の他敷物ともす。  
(ホ) 「アマニン」油紙 繃帶の下に覆ふ不潔物浸入を防ぐにあり。

へ 絆創膏 小創の場合に用貼用す。

## 第八章 人工呼吸法

人工呼吸法は、應急手當法中最も必要なる術式にして、之れにより假死者を蘇生せしむるにあり。

### (一) 初生兒假死に對する人工呼吸法

先づ假死の原因を除くべし、こは獨り初生兒のみならず一般蘇生法の眼目たり。反言すれば鼻により新鮮なる空氣の充分出入することに力むべし。初生兒にして胎胞破れず其のまゝ分娩したるものは、速かに切開し布片を巻きたる示指を深く咽頭内に挿入して粘液を拭去すべし。

臍帶纏絡しある者は之れを緩解し、切斷したる時は緊縛し次で左の方法に移る。

第一法 兒體を布片にて包み背部を摩擦し、後人膚位の温湯中に入れ、又取り



出して温き布片に包み摩擦する等頻回反覆す。

**第二法** 尚ほ効果なき時は冷水を兒背及心窩に數回注加す、時としては水筒を用ふべし、但し冷水注加を畢る毎に温湯中に入ることを頻回反覆すべし。

**第三法** 尚ほ効力なき時は人工呼吸法を行ふ。其の法先づ假死兒を温浴中より出し、背を術者の兩手上に支ふ、即ち一手を頸部の下他手を臀部の下に入れて支持し、且つ頭部を適當に下方に垂れしめ、軀幹を屈伸して腹と胸とを壓し或は伸し、以つて大氣を肺中に入らせしむ、即ち屈すれば呼氣となり伸せば吸氣となる、而して此の措置は數分時の後更に兒を温湯に入れ保温せしめざるべからず。

**第四法** 或は兒を温浴中に水平に保持し、一手を頸部に他手を臀部に當て顔面のみを出し置き、水平に頭方及足方と彼方此方に徐々として移動せしむ。即ち足方へ移動すれば上肢胸廓より離れて上昇し吸氣となり、頭方に移動せしむれば

上肢胸廓に近接し呼氣となる。

**第五法** 最も有力なるものは「シユルツエ」氏蘇生法なり。其の法(甲)先づ假死兒の兩肩胛部を後上方より把持し、其の拇指を以つて兒の鎖骨を越へて胸廓に當て、示指を以つて後方より上膊を保ち、他の三指を以つて背部に當て固持す次で兒を圖の如く(乙)上方に捧げ、兒頭は下方に骨盤及下肢は胸腹の前に垂れしむ。然る時は胸廓壓迫せらる、即ち甲は吸氣にして乙は呼氣なり。

此の速度は一分間二十四五回にして此れを終れば兒を再び一分間温湯中に入る而して蘇生法に安靜に且つ適

(甲)







宜の間缺時を以つて常に同調に行ひ永時間連續するを要す。決して短時間内に蘇生せざるも落膽すべからず。

## (二) 大人の人工呼吸法

天候の許す限り可成戸外に於て行ふべし、若し室内にて行ふならば窓戸を開放すべし、而して假死者の上半身を露はし仰臥せしめて少しく上半身を高くし、頭首を下垂し兩脚を平行に伸展せしむ、人工呼吸を行ふ豫備として指頭を頬部より齒間に入れ「コルク」栓木片等を以て開口せしめ、次で舌を引き出して布片にて巻き、介者の左拇指と示指とにて固定せしめ、舌の退縮を防ぐ。若し介者なき時は引き出したる舌を頤の上に付け、細き布片にて縛付くべし。或は介者を

して兩手を以つて下顎隅角を把へ、下齒列を前方に引き出し、上齒列の前に送り以つて通氣の道を作るべし(A圖)

普通應用せらるゝ人工呼吸法は分ちて二とす第一法第二法之れなり

**第一法** 假死者を平に仰臥せしめ、衣服或は適當物を束ねて背下に差入れ頭部を低くす、術者は患者の頭邊に跪き兩手を以つて兩臂の稍々上方を握り平等に上方に牽引し頭の兩側に至る(甲)、之れにより胸廓は強く擴張せられて吸氣となる約二秒時にして伸張したる上肢を曲げて胸側に送り強く胸側を壓迫す(乙)、之れ呼氣なり而して二秒の後又甲法に移り次で乙を反覆す。

以上の操作は一分時十二三回の割合を以つてし、數十分乃至數時間に涉り忍耐して之れを行ひ、時々自發呼吸を爲すや否やを視察すべし。呼吸機能回復するにしたがひ蒼白なる顔面殊に口唇は血色を呈するに至る。

**第二法** 假死者を仰臥せしめ、適當なる枕を腰下に入るゝこと第一法の如し

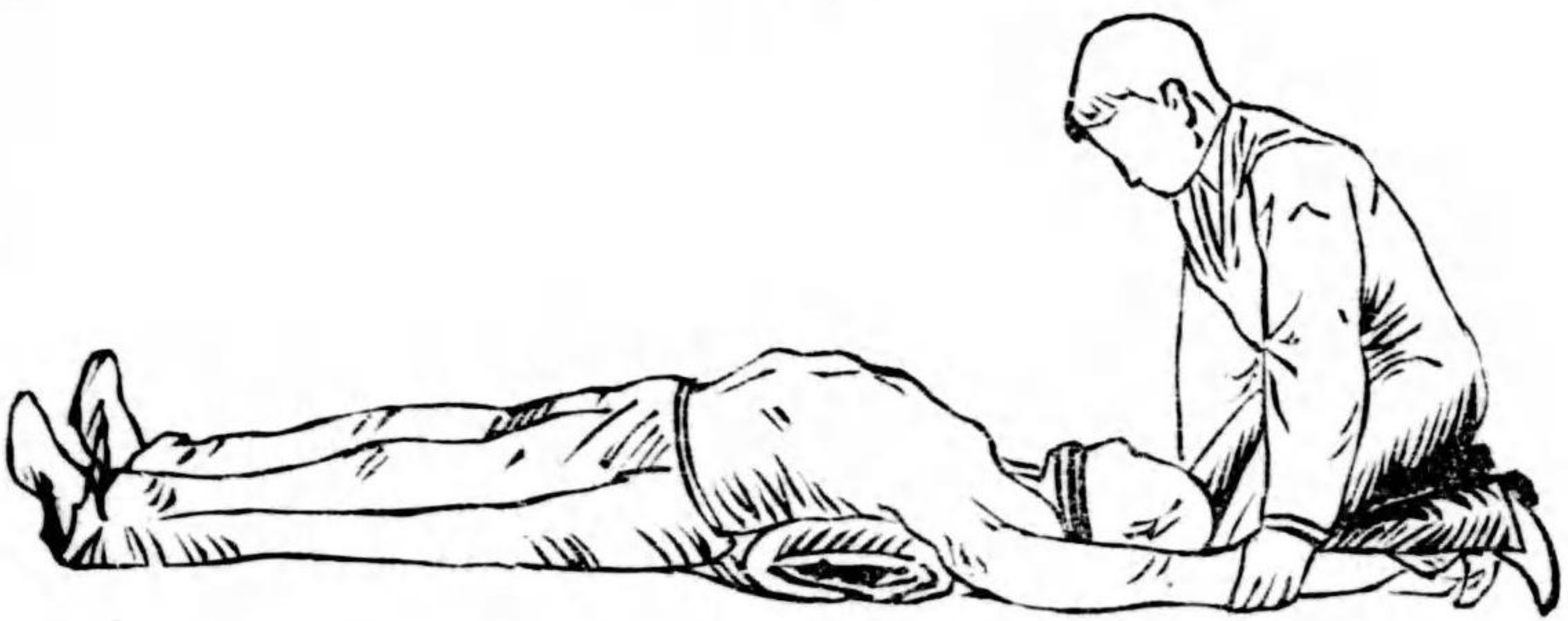


人工呼吸法

(圖のA)



第一法 (甲)



(乙)



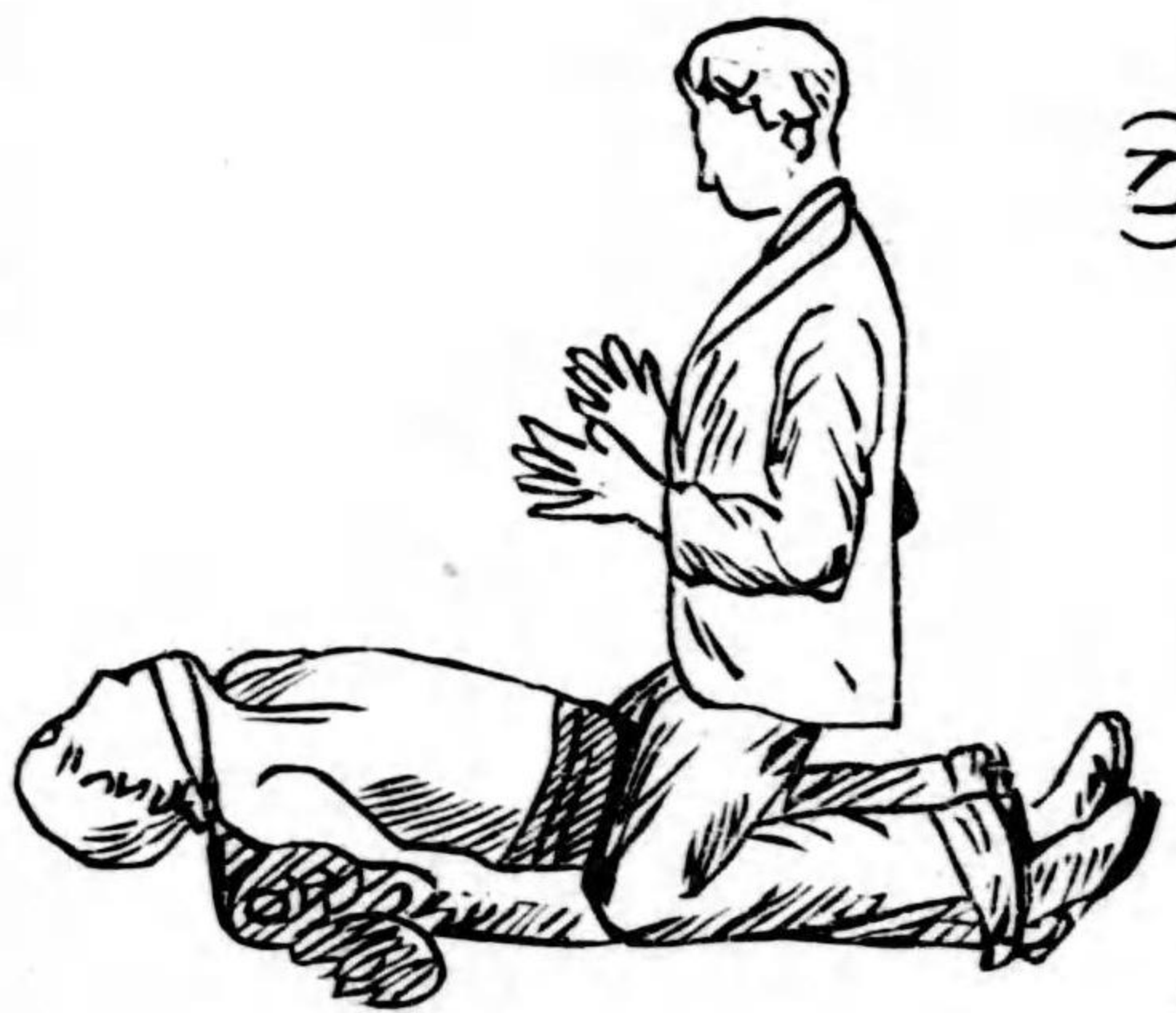
(三二)

人工呼吸法 第二法

(開口法と同じ)。假死者の兩上肢を真直にし、或は背部の下に支又す術者は假死者の股部に跨りて跪坐し、假死者の胸部下部に兩手掌を貼して押壓し、肋骨を脊柱に近接せしめ、且つ少しく上方に壓迫し、術者の臂を自己胸部に支へ、身體を俯屈し其の體重を以つて胸の壓迫を補はしめ術者の顔は假死者の顔に接觸するに至るべし



(甲)



かに今迄壓迫しありたる兩手を放ち、自己の身體を擡ぐ(乙)之れ吸氣なり而して約二秒時の後又反覆すること第一法の如し。



### 人工呼吸時の注意(十大事項)

- 一、暴力を用ふべからず。
- 二、操作速かに失し、空氣肺中に進入し酸素の吸収に違なきことあり、要するに人工呼吸法は普通呼吸數より、少なきを法とす。
- 三、胸廓壓迫過激にして肋骨々折皮下溢血を來すことあり、殊に小兒に於て多し此の注意は最も必要なり。
- 四、短時に蘇生せざるも失望すべからず、數時間後に至り蘇生したる實例尠からず、善く忍耐するを要す。
- 五、自發呼吸をなすも、油斷安心すべからず、整然回復する迄續行すべし。
- 六、人工呼吸の操作は須らく練習すべし、其の方法を知るも應用不自然的ならば、完全なる呼吸を行はしむること能はず。
- 七、人工呼吸實施に先ち咽頭内異物の清拭開口舌牽引を怠るべからず。
- 八、嘔吐を來す時は顔を側方に傾け以つて吐物の吸入を防ぐべし。
- 九、精神明瞭となる迄は決して水藥物を與ふべからず。
- 十、時々大聲叫喚するも又一法なり。

## 第九章 内科的疾病

内科的疾病の應急手當を爲すには、豫備として左記要項を知らざるべからず。

- (一)芥子泥の使用法 芥子を湯にて練り泥狀となし、布片に一分位の厚さに塗り、油紙類にて上を包み皮膚に貼すること數分、局部の灼熱、疼痛を覺え赤色を呈するを度とし除去すべし。若し誤つて長時間放置する時は水泡を生じ糜亂するにより注意を要す。

芥子泥の作用強き時は、「メリケン」粉の如き澱粉を混加し其の作用を弱むべし。

- (二)罨法 冷罨法温罨法あり又濕潤罨法と乾温罨法との各種あり、



(A) 温湿罨法 此れを簡易に施すには、木綿布を熱湯中に浸漬し適度に絞  
りて貼す。

又麥米の粉或は麩ぶすまの類を水に混じ、煮沸して濃厚粥状となし、之れを指の厚さ  
位に軟なる木綿布に塗布したる後、其の布片を折轉し之れを包み温度を試験し  
目的部位に貼す。而して長く温度を保たしむるには、厚き毛布又は綿を以つて  
之れを掩ひ冷却せば更に温むべし。或は米飯を温めて布片に包みたるもの又は  
菑藟を煮て用ふるも可なり。

(B) 乾温罨法 簡易なるものは鹽を灼き布片に包みて用ひ、又は温婆温石懷爐  
等なり但し之れを使用する時は上を「フランネル」類にて被ひ、火傷せざる様注  
意すべし。

(C) 冷罨法 單に冷水を布片に濕して用ひ、或は氷を時としては醋水等分のも  
のを用ふるも可なり。而して氷は直接に局部に貼する時は寒冷に過ぎ疼痛を發

することあるにより、豫め布片を皮膚に置くを要す。

冷罨法を急に除去する時は、局部反て熱寒を來すことあるにより、可成徐々に  
取り去るべし。

(D) プリスニツツ氏罨法 冷濕なる布片を皮膚面に貼し、上に油紙を當て更  
に其の上を「フランネル」類にて被包し置くときは、體温により自然温暖となる  
を以て、一定時間(一時間以上二時間)放置する時は濕温罨法となる。

此の罨法は有名なるものにして、肺炎小兒毛細氣管支炎に有効なり。併し應用  
する時は醫師の示指を俟つべし。

内。科。的。疾。病。各。論 (突發し易き急性病のみを掲ぐ)

### 一、急性腦貧血

原因 精神感動(失望落膽の如し)密室内群居、貧血性者の過劇運動(消防、運動  
會の如し)、大外傷、及内臓出血による亡血、急性下痢、睡眠不足、一般疲勞者



等は特に本病を誘發す。

**容態** 顔面蒼白となし、眼瞼、口唇、齒齦粘膜、甚だしく貧血し、冷汗を出し四肢血冷、嘔心、嘔吐あり。脈は細小となり、瞳孔散大、卒倒し人事不省に陥る者あり。

**手當** 患者の被服を弛め(「シャツ」襟卷きの類)、呼吸の容易なる様注意し、患者を速かに仰臥位となし、空氣の流通を可良ならしめ、枕を施こさず頭部は軀幹より低下せしむ。

人事不省に陥りたる者は、顔面胸腹部に冷水を吹き、次で乾燥したる手拭「ハンカチーフ」の類にて、擦拭することを數回反覆すべし重症にして蘇生困難ならば、亡血性腦貧血の疑あり、殊に内臓出血に注意すべし。

次で人工呼吸法を行ふことあり。

嘔吐する患者あらば、速かに頭部を側方に傾け、吐物の氣管支内速人を防ぐべし。

人事不省者に猥りに内服薬を與ふるは反て危険あり、故に内服薬を與ふには、患者意識を生じ、應答乃至嚔下作用なかるべからず。

藥品としては與奮藥なり、即ち「ホフマン」氏液數滴乃至十數滴を、年齢により水に滴加し與ふ、

赤酒は一回五・〇乃至一〇・〇グラム、若しくは其の以上を與ふべし。

患者恢復せば一定時間安臥せしめ、運搬する時は可成擔架を用ふべし。

## 二、急性腦充血

**原因** 多く多血飲酒家に發す、又は心臟病者、夏時長途の運動、慢性便秘症、精神亢奮、(激怒)頸部動脈の壓迫、頭部低下等より來る。

**容態** 顔面潮紅、眼球結膜充血し、連りに頭痛、眩暈、耳鳴、衄血、時として



は嘔心、嘔吐を來す。

脈搏は強實し、呼吸深太、瞳孔縮小終に、卒倒して人事不省となり、ひびき鼾聲を發す。

**手當** 衣服を緩め仰臥位となし、頭部を高舉し、冷卷法を施すべし。

誘導法としては浣腸を行ひ(グリセリン坐薬挿入)、下脚に芥子泥を貼し、耳後に水蛭ひるを付くることあり。

内服薬としては下劑(大黃〇・五乃至一〇)を與へ、又は「アスピリン」錠(〇・五)臭素「ナトリウム」(一〇—二〇)を與ふ。

(人事不省者に内服薬を與ふべからざるは前に説明したるが如し)

蘇生せざる時は人工呼吸法を施す、要するに腦充血は腦貧血の反射手當を爲すべきものにして、興奮薬を與ふるは反て害あり)。

### 三、假死と眞死との區別

眞死とは、呼吸運動、心臟作用、反射作用、吸收作用、分泌作用、其の他一般の生活現象絶無となる。

假死とは、呼吸運動なきも、心臟作用反射作用あるにより、瞳孔散太しあるも光線に會へば收縮運動をなし、且つ眼球結膜に手を觸れしむる時は閉眼作用をなす。

心臟部に(左胸乳房部)直接耳を接する時は幽かに心音を聴取し得べし。

呼吸の存否を知るには女子は胸を、男は腹を特に注意して視察すべし。

眞死假死の區別は最も必要なり、假死を眞死とし相等手當を爲さざるは、患者の不幸此上もなく遺族の遺憾極りなかるべし。故に諸士は眞死と雖も假死と見做し、一應の手當を施すは人道上必要なことなり。

### 四、日射熱(熱射熱又同し)

日射熱とは直接日光の曝射を受け、熱射熱とは間接に高温を受けたる爲めに發



する急性病にして、容態及手当法は二者同一なり。

**源因** 夏時日光の直射屋外の運動蒸熱時に於ける屋外、又は屋内の群居衣服の厚着飲料の欠乏、睡眠不足下痢空腹等を主なる源因とす。婦人の如きは發汗を嫌ひて飲料を節し、厚着をなし爲めに本病に罹る者あり。

**容態** 身體倦怠となり、耳鳴眩暈脱力を覺へ、甚だしきは終に卒倒人事不省に陥る、而して顔面潮紅脈細小となり呼吸又淺表となる。

夏時發汗の停止し、唾液の分泌排尿之れなきに及び、甚だしく倦怠眩暈脱力を覺ゆるときは本病の前驅と知るべし。

**手当** 豫防法としては常に多量の飲料を取り以つて發汗尿量の多かることを心掛くべし。夫れ發汗は温熱の體内に鬱帶するを防ぐ作用をなす。

本病を發したる患者は、速かに患者を樹蔭室内等の通氣善良なる清涼場所に移し、裸體となし飲料を多量に與へ、全身をあをぎ或は冷水を全身に注加し場合

により冷水洗腸を行ふ。

藥品は多量の赤酒「ホフマン」氏液十數滴を與ふ。

**注意** 本病は夏時頻發する危険なる疾病なり、殊に規律嚴正なる下に運動せしむる時は最も發起し易きものなり、軍隊學校客行等之れなり。故に古來より暑氣中りの豫防として木瓜を食し、燒酎を用ふるは一理あることなり。

## 五、熱性諸病

**源因** 茲に曰ふ熱性諸病とは一般熱性病を總稱する意味なり。例へば流行性感胃、チフス、腦膜炎、「ヂフテリヤ」、肺炎、流行性腦脊髄膜炎、肋膜炎、「ペスト」、急性關節炎、膿毒症、敗血症、丹毒、其の他諸病にして高熱を發する者を謂ふ。

**容態** 體温攝氏三十九度以上を高度と云ふ、斯るときは患者食慾不振となり、口渴頭重頭痛倦怠運動不活潑若くは不能となる。

脈膊は頻數にして、九十乃至百以上を數ふ、高熱の永く續くときは、身體疲勞



衰弱するのみならず、終に心臓痲痺を來し死することあり。就中心臓病の痲疾ある者、酒客、貧血者、營養不良者等平素に於て健康ならざる者は、高熱に耐へざる者なり。

**手當** 原因により異なるべきは謂ふに及ばず、併し應急手當法としては専ら患者に安靜を命じ、頭部及心臓部に冷罨法を施し、食物は必ず流動性を與へ便秘せば浣腸を施すべし。

**注意** 衰弱したる患者に浣腸を施す時は、醫師の命を守るべし反すれば危険なることあり。

藥物としては「アスピリン」小兒には一回〇・二乃至〇・四以内、大人には〇・五乃至一・〇以内一日三四回を與ふ。

心臓藥としては赤酒「ホフマン」氏液を與へ、其の他清涼劑として薄荷油を與ふることあり。

三十九度以上の熱は何病を問はず危険なるにより、速かに醫診を需むべし。

## 六、頭痛

**原因** 單純の頭痛は習慣性なること多し、天候の變化により發するが如き之れなり。

頭痛は感冒、熱性諸病、睡眠不足、腦充血、神經衰弱、炭酸瓦斯中毒等より來る。

**容態** 自訴により知る、併し顔貌運動不活潑其の他の動作により判定し得ることあり。

**手當** 熱により發せし頭痛は頭部を冷し、便秘せば浣腸を施し務めて原因を除去すべし。

藥物としては「アスピリン」を與へ、又は臭素「ナトリウム」小兒には〇・三乃至〇・五、大人ならば〇・五乃至一・〇を一回量とし一日三四回を與ふ(水藥とす)。

## 七、急性胃腸「カタル」



**源因** 多飲多食或は變敗したる魚肉獸肉其他一般飲食物により來る、夏季は消化機能衰弱するにより、常食にて己に本病を惹起することあり。就中取食後間もなく就眠するが如きは最も本病を誘發し易し、故に夕食は可成早時にし、少なくとも食後二時間以上にして就床すべし。

**容態** 患者は腹痛嘔心嘔吐あり、腹部雷鳴吐瀉する者あり、本病は「コレラ」赤痢と誤らる、又反對に「コレラ」赤痢を本病と誤ることあり、概して本病の下痢は水瀉なり「コレラ」は下痢便白色なり。

**手當** 腹部を保温す、必要によりては下腹に温巻法を施す、嘔吐に對しては氷片を取り、若くは心窩部を冷巻法を貼することあり。飲食物は空腹を訴へ、若しくは口渴なき限り節なるを良とす、食を欲するは恢復の徴なり食様なきは、未治の驗なるなり。世間には食せざれば癒るすとて、無理に取食せしめ往々慢性症に陥らしむる者あり。

藥物としては、健胃止瀉散一〇を一回料とし、同時に或は前に驅蟲劑一回〇・二一〇・三を與ふ(大人は〇・五以上)。

## 八、腹痛

**源因** 腸「カタル」なくして、單に腹痛を來すものは、飽食蛔蟲刺戟便秘に源因することあり。或は腹部を冷却して疝痛(腸の神経痛)を起すことあり。

**容態** 疝痛ならば下腹硬牽し、蛔虫飽食ならば腹部膨滿雷鳴あり、要するに自訴により知るべし。

乳兒の腹痛は足を屈し啼泣するにより推定すべし。

**手當** 源因宿便ならば浣腸を施し、疝痛ならば腹部を保温し食物を禁じ健胃止瀉散若しくは驅蟲劑を與ふこと前方の如し。

鼓腸は腹部を按摩し、次で薄荷油一滴を水に加して與ふ次で浣腸をなす。

## 九、胃痛



### 源因

胃「カタル」性の外、飽食或は胃の神経痛(癢)胃潰瘍胃癌等より起る。

### 容態

癢なる時は胃部硬固となり、疼痛發起に間欠あり。潰瘍癌腫の如き時は吐血下血其他既往症あるべく、合併病として現はるゝものは、他に疾患を認むべし。要するに本病も又自訴により知るべし。

### 手當

源因を問はず安靜とし、癢なるを知らば適度の壓迫を加へ、或は温罨法を施こし、芥子泥を胃部に貼すべし。其の他の源因ならば先づ其の源因を治療せざるべからず。

内用薬としては健胃止瀉散を與へ、下劑浣腸を必要とすることあり。癢なるを知らば臭素「ナトリウム」「アスピリン」を與ふ。

## 十、神経痛

### 源因

本症は主として精神の過勞(神経衰弱者に多し)、ロイマチス性痲疾ある者、又は微毒鉛中毒者等にして誘因となる者は感冒冷却濕地の住居等なり。

### 容態

疼痛發作性に來るを例とす、而して主として病む神経は坐骨神経(下肢後側にあり)、顔面神経(顔に分布するもの)腰神経(腰部にあり)肋間神経(胸にあり)肩胛に分布する神経尺骨腕骨神経(手の痛むもの)なり。

### 手當

痛部は保温し芥子泥を貼し、又は沃度丁幾を塗布し時としては「イヒチオール」軟膏を塗擦す。

内服薬としては「アスピリン」又は臭素「ナトリウム」の頓服を良とす(頓服は普通量より少しく多くす)。

## 十一、鼻出血(衄血)

### 源因

腦充血、打撲、並に鼻粘膜潰瘍(外傷多し)充血等より來る、女子は月經の代償として本病を來すことあり。

### 容態

鼻腔より流血するにより知る、併し夜間(就睡中)衄血ある時は血液徐々



血と主張する者もあり。

**手當** 頭部を高舉し安靜を命じ頸部衣服を弛むべし。次で頭部特に鼻梁を冷し

「ガーゼ」脱脂綿花を球状となし、絲にて緊縛し深く鼻腔を栓塞すべし。

尙ほ頸部に氷嚢を貼し、洗腸をなし、下肢に芥子泥を貼じ誘導するも宜し。

或は食鹽水一杯を頓服せしめ、又は「アスピリン」を與ふ。

近時綿栓を施こさず、鼻梁を拇指と拇指にて強く壓迫し止血するものあり。

頭部を直立し耳翼の下端を手指にて強壓すること十五分時なる時は止血す。

俗間療法として頂窩うなじの毛を拔去する時は止血す、之れ反射的に血管收縮を促し

以つて止血するにあり。

## 十二、咯血

**源因** 肺臓より出血するを咯血と謂ふ、本病の來る主なる疾病は肺結核及肺

「ヂストマ」なり。

**容態** 咯血は咳嗽に伴ふこと多し、咯血する者は多くは結核症を有し、判定

困難ならざるも、體格營養佳良にして而かも結核症なる者あり。肺「ヂストマ」

患者も又比較的營養佳良なる者あり。

**手當** 上半身を高くし、絶対に身體の運動を禁じ、且つ精神を安靜ならしめざ

るべからず、此の必要より患者の病室を少しく暗くすることあるべし。

患者は衣服を弛め談話を禁じ、務めて咳嗽を禁せしむ、次で呼吸も淺表ならし

めざるべからず。

一回の咯血にて頓死するが如きは稀有なり、頻回反覆する咯血は衰弱を來さし

むるにより危險あり。

咯血する時は患者非常に恐怖するものなるにより、婦人は反而沈着冷靜なる態

度を持し、専ら患者を慰安し且つ勇猛心を奮起せしむべし。

咯血ある時は婦人周章狼狽し、心得なき者は言語動作に於て患者を悲觀に導く



者あり、看護者の最も注意を要する處なり。

手當 内用薬としては食鹽を稍々多量に水にて頓服せしむ。胸部に氷嚢を貼す

此の氷嚢は可成重量を加へ、胸廓の呼吸運動を制限せしむ。

芥子泥を心窩部又は下肢に貼し、血液の誘導を企つると同時に刺戟する時は、

反射的に血管收縮を促し奇効を奏することあり。

咯血ある時猥りに興奮薬を與ふる時は反而出血を促進するものなり。

### 十三、吐血

原因 本症は胃潰瘍胃癌より發すること多し、胃潰瘍は青年殊に女子に多く胃

癌は老年殊に酒客に多し。

容態 本症は嘔吐に伴ふて吐血す前驅として胃痛あるを常とす。

慢性胃潰瘍は比較的多き疾病にして胃の痼疾ある者は注意すべし。

手當 安静を命じ胃部に氷嚢を貼し或は氷水を飲下せしむ。

飲食物は強いて與へざるを良とす。

内服薬としては健胃止瀉散一〇づつを一日數回に用ふ。

### 十四、咯血と吐血との區別

咯血

一、咯血は咳嗽に伴ふ

二、肺病の症候あり

三、鮮紅色泡沫未あり凝固性乏し

四、「アルカリ」性反應あり「ラクムス」試験紙(赤)青變す

注意足らざる患者は突然の際區別に困むことあり。

吐血

一、吐血は嘔吐に伴ふ

二、胃病の症候あり

三、暗黒色食物殘片あり凝固性强し

四、酸性反應あり「ラクムス」試験紙(青)赤變す

### 十五、下血(腸出血)

原因 腸潰瘍腫瘤の破潰より來ること多し、就中腸「チフス」により下血する者

は最も危険なり。



### 容態

便と共に下血するを常とす、併し下痢後絶食後には單に血液のみなることあり。色は暗紅色又は黒色なることあり。

概して腸の上部より出血するものは便と能く混加し、黒色にして凝固することあり。

腸の下部(大腸)より出血するものは便の周圍に附着す、痔の爲めに來る出血は注意せば區別し得べし。

### 手當

安靜を命す若し出血部を知るを得ば其の部位に冷卷法を施し、食物は流動性のものを少量づゝ與へ、必要によりては冷して用ふべし。

藥物としては健胃止瀉散一〇位づゝを數回に與ふ。

## 十六、齒齦出血

### 原因

血支病、壞血病、齒齦炎、及齒齦、打傷等より來る。

### 容態

目睹し得るを以つて知る。

### 手當

打撲にて齒列不整を來したる者は速かに整復し後食鹽水硼酸水にて含嗽をなし齒齦炎なる時は等分沃度丁幾(酒精にて稀釋す)を塗布す、民間にて「おはぐろ」を用ふる者あり良法なり。

壞血病は青物の欠乏より來る、船員籠城軍等に發す。

血支病は殊に女子に多し、小創を蒙るも容易に止血せざる者あり外科手術を受け又は負傷せざる様注意を要す。

## 十七、齒痛

### 原因

齶齒齒根膜炎等に來る。

### 容態

自訴により知る。

### 手當

齒根膜炎なる時は沃度丁幾の稀薄液を塗布し、畜膿したる時は切開し次で食鹽水硼酸水の含嗽をなす。

齶齒ならば脫脂棉花に「アルコホール」を浸したるものにて腔洞内を清潔し、次



で齒痛藥を錦球に浸し充填し止痛せざれば再三交換す。

薄荷油を同法により充填するもよし。

或は外部より冷罨法若しくは温罨法を施す、此の罨法は患者の希望に任す。

## 十八、虚脱

**原因** 營養不良なる者貧血者、下痢、吐瀉、飢餓、熱性諸病ある者及睡眠不足者等

にして強劇の運動(殊に夏時)爲か若くは大出血なす時は虚脱に陥ることあり。

**容態** 體温著しく下降し脉膊細小系の如く顔面諸粘膜血色を失ひ甚だしき時は意識昏朦状となる。

**手當** 原因により異なるも先づ患者を安静とし、全身を温包し頭部を低下し時々神經を刺戟して(言語を發し又は按摩するが如し)假死に陥るを防ぐべし、就中必要なるは勇氣を鼓舞するにあり。

内用藥としては「ホフマン氏液」赤酒を與へ芥子泥を胸腹下脚に貼す薄荷油を口

に塗るも可なり。

## 十九、昏睡(人事不省)

**原因** 急性腦貧血、急性腦充血、腦出血(卒中)腦震盪、日射病、其の他一般重

症患者の死期に現はる。

**容態** 諸種の刺戟に對し五官機能の反應極めて鈍し。

**手當** 人事不省者に内服藥を與ふるは反而危険あり、故に皮膚を按摩して刺戟を與へ又は芥子泥を強く貼す(部位は下脚胸腹上肢内側)。

其の他一般蘇生法特に人工呼吸法を行ふべし。

## 二十、痙攣

**原因** 腦膜炎、破傷風(強直)狂水病、小兒の蛔虫、刺戟、赤痢(小兒疫痢)中毒、高

熱患者、極端なる驚愕等にて反射性に來るものと細菌性毒素と藥品の中毒

との種類あり。



手當 本症は中樞神經(腦脊髓)の興奮性より發するものなるにより鎮靜を圖るを要す。

患者は衣服を弛めて呼吸を容易とし暗室に入れ音響談話を禁じ熱強ければ冷褌法を頭部に施こし宿便あらば浣腸を爲す。

醒覺せば「アスピリン」「臭素」「ナトリウム」の如き鎮靜解熱藥を與へ小兒なる時は第一に驅虫劑を與ふ。

興奮藥は與へざるを法とす。

## 二十一、癲癇

源因 本病は十才乃至二十才位の壯齡者に好發するも老年に至り發する者あり。

主なる源因は遺傳なるも父母の酒客(多くは父)により或は妊娠中に於て精神感動の爲め來ることあり。

容態 俄然痙攣を發して拇指を内屈して卒倒し口角泡未を吹き腫孔散大四肢硬

屈す、而して數分間の後發作消散覺醒するを普通とす。

發作の輕度なるものは年に一回或は數回に止まり發作時間も又短時なるも稍々重症なる者は毎月數回或は日々の發作ありて時間又短からず。

本症は最も忌むべき腦病にして危險ある場所にて發作する時は往々變死を遂ぐる者なり。概して癲癇は精神的刺戟により、突然發作すること多し、火、水、人、癲癇なぞと古來より唱へらるゝは即ち如此ものにて刺戟せらるゝが故なり。

之れに反し著明なる外觀的發作なく、彼の癲癇狂とて俄然精神の異常を來し(發作)無意識(朦朧狀態)に陥り其の間殺人犯乃至不徳行爲を敢行し、風紀を紊る者ありて發作消退後自ら驚くが如き者あり。

癲癇患者は智力の鈍なる者多し、之れに反し極端に英智なる者あり破天荒の業績を顯はせし「シューザ」「ナポレオン」の如きは本病の發作時に當り殊に慘劇な



る行爲多かりしと聞く。

### 手當

常に臭素劑を服用するの外精神の刺戟を避くべし、不規律なる生活諸種の疾病は本病誘發の源因となる。

發作には必ず前驅症あり、之れを「アウラ」と云ひ下肢より風の吹き上り、或は蛾走の感又は頭重不快倦怠等あり、此れは本人の注意力により豫知し得るが故速かに安臥し危険に陥らざるを良とす。

發作せば患者を暗所に安臥せしめ衣服を弛め卒倒により負傷せざる様身邊の危害物を取り除くべし。

發作時狼狽して水を與へ藥物を飲ましむべからず、要は外傷を避け舌の咬傷をなからしめ徐ろに發作の消退を俟つべし。

## 二十二、脳震盪症

### 源因

轉倒墜落衝突等により急劇に頭部を打撲し或は振遙する時は本症を

發す。

### 容態

人事不省となり顔面蒼白皮膚冷却脈膊細小遲除となり呼吸淺弱にして虚脱症狀を來す。

併し談話に應答することを得も多くは徐々に覺醒するも重症なる時は死亡す。

### 手當

安靜に仰臥せしめ血冷あらば身體を保温す覺醒前内服藥を與ふべからず。

内服藥は主として興奮藥にして赤酒「ホフマン」氏液とす。

## 二十三、急性腦膜炎

### 源因

傳染病菌の毒素膿毒症、敗血症、耳鼻炎の波及頭部打撲等を主なる源因とす。粟粒結核を起す時は本病を發す小兒の腦膜炎は多く結核性なり。

### 容態

頭痛強く發熱す頂部硬固となり、頭首の回轉困難なることあり、小兒は一日數回嘔吐を來し斜視し時々「キーン」と發聲することあり。



患者は精神昏朦状となり、痙攣搐搦を來す腫孔は始め縮小し末期には散太す必要なるは無痛にして注射に當り痛からざることなり。

重篤に陥る時は「シャイネーストック」氏呼吸現象を現はす。

**手當** 安静にし極力頭部を冷却す脈膊強力ならば、臭素「ナトリウム」「アスピリン」大黃末を與へ浣腸すべし、小兒なる時は驅虫劑を與ふ。

脈膊不止衰弱の徴あらば「ホフマン」氏液時としては赤酒を與ふることあるべし。

**注意** 頭部の冷卷法は氷嚢にて可なるも、同時に水枕を行わしめ、若し氷なき時は清泉水食鹽水或は水瀧を作りて打たしむべし。

## 二十四、心臟摩痺

**源因** 高熱、中毒脚氣症、劇運動の持續等苟くも心臟作用を過勞せしむるものは源因となる。

**容態** 四肢血冷心音微弱脈膊頻數細小となり時々不正結帶し或は急に強力となることあり。

患者は違和恐怖を訴へ粘膜爪面に藍紫色を呈す（皮膚毛細靜脈暗紫色に認めらる）。

心臟病の痼疾ある者は熱性病に堪へず、運動又然り先天性に心臟病ある者は運動不活潑なり、（強いて健康者と倣し運動せしむる時は、摩痺症狀を來す故に學校に於ては特に注意を要す）。

**手當** 絶対に安静となし赤酒「ホフマン」氏液を與ふ。

心臟部を冷すは危険なることあり。

## 二十五、喘息

**源因** 鼻、咽喉、氣管支、胃腸病、子宮病、腎臟病、心臟病等より反射的に發す。

**容態** 主要症候は呼吸困難の發作なり此は多く夜間に現はる。



患者は胸内苦悶呼吸困難ありて自ら衣帯を解き窓戸を開放して呼吸の容易ならむことを欲す。

次で粘膜蒼白色を呈し頸部脉管努張し冷汗を發す、呼氣は吸氣より長く所謂喘鳴を發し胸廓呼吸運動微弱なり、本病は睡眠不足感冒不規律なる生活は誘發の動機となる。

**手當** 源因たる病に向つて治療す、發作したる時は患者をして呼吸に容易なる位置を取らしめ、鎮靜藥として臭素「ナトリウム」一・〇以上の多量を與へ、アスピリン又効あり、室内は水蒸氣を發せしめ室内は可成暗くすべし。

## 二十六、溺死

**源因** 水練未熟或は不慮の洪水船の沈没により溺死する者は論外とし、茲に溺死の源因として主要なるものは水泳の爲め急に冷水中に飛入し爲めに反射性に筋肉痙攣を起し運動不能となるにあり。

**容態** 假死(第八章假死と眞死との區別参照)に陥り終に眞死となる。

溺死は多量の水を飲下する爲めに死するにあらず、主として呼吸を妨ぐるによる故に蘇生後嚥下性肺炎を起し、若くは下痢を發す糞池に陥り腸「チフス」を發せし事實あり。

**手當** 先づ溺死者を腹臥となし頭部を低下し或は腹に枕を充て背部を按壓し以つて吸入嚥下したる水液を嘔吐咯出せしむ。

地方により溺死者の腹に水甕を充て腹臥せしめ甕の内にて藁を燃き以つて温暖を取らしめ同時に嘔吐せしむるものあり。

咽喉部は手拭「ハンカチーフ」「ガーゼ」の類を指に纏ひて清拭し次で手指羽毛の類を深く挿入して粘膜を刺戟し咳嗽嘔吐を催進せしむ。

次で身體を強く摩擦するか火氣にて全身を温め人工呼吸を熱心に持續すべし(肛門に指を挿入れ括約力あるは假死なり)



蘇生したる時は「ホフマン」氏液赤酒の類を與へ身體を安靜とし温暖ならしむ。元氣恢復せば大黃末若くは驅虫劑の如き下劑を與へ胃腸内容物の下泄を企つべし。

嚥下性肺炎は數日内に多く現はる故に高熱を發し、呼吸促迫し咳嗽咯痰あらば速かに醫診を求めざるべからず。

豫防法 水中に入る時は先づ河水海水にて顔面を洗ひ、次で四肢全身を濕ほし皮膚を慣れしめ後游泳を始むべし決して熱したる體を一擡水中に浸すべからず。

## 二十七、縊死及絞殺

源因 二者共に頸部を壓迫し腦の血行を中絶せしむるにより發す縊死は自殺にして絞殺は他殺なり。

容態 二者共に假死の状態ならば蘇生すべし。

手當 最も速かに頸部に纏絡しある緒類を解除し衣服を緩め仰臥位となし大聲之れを喚び次で式の如く人工呼吸法を施すべし。

縊死體を發見するも檢視を受くる迄放置する者あり、之れ不心得のことなり、宜しく斯る屍體を發見せば速かに相等注意の下に紐を切り抱き下し、假死なるや眞死なるやを定め、若し體温あり反射作用ありて假死なるを知らば、人工呼吸法を行はざるべからず、何んとなれば縊死は多くは自殺にして他殺後縊死狀を装はしむるが如きは極めて稀なればなり、若し他殺ならば他に區別の方法あり何んぞ現状のみ必要あらむや。

## 第十章 中毒

### 一、急性アルコール中毒

源因 「アルコール」性飲料により發す、「アルコール」の致死量は未定なる

中毒



も、小兒に在つては三〇・グラム位なるが、飲用に慣れたる大人は、一〇〇・〇乃至二〇〇・〇を用ゆるの後始めて中毒を來す、(一・〇グラム一々目約四分一なり)。

**容態**

皮膚潮紅患者は灼熱の感を訴へ、興奮状態となり、動作活潑饒舌高笑す

次で鬱憂期に移行し睡眠を催ふし、視力減弱昏睡状態に陥る。

腫孔反應遲鈍し、體温甚だしく下降し、脈弛緩、心動微弱、となる患者は寒冷に對する抵抗力欠乏し、容易に凍死す。

**手當** 頭部に冷罨法を施こし、洗腸を行ふ、若し重篤ならば温浴を取らしむべし。

其の他多量の飲料、(水、茶、ラム子「サイダー」重曹水等)を與へ排尿を促すべし。内服薬としては「アスピリン」を與ふ。

**二、「メチールアルコール」中毒 (附會眼つふれアルコール)**

**原因**

普通「アルコール」は、學名「エチールアルコール」にして、「メチールアルコール」は、昨今世人に知られたるものなり、「メチールアルコール」は價廉なるにより、普通「アルコール」代用として、奸商之れを混用せり、葡萄酒の粗悪混製品(一本五六十錢)にして、廉價なるものに發見し若しくは労働者の酒舖に於て、販賣せられし強酒に混合せり。

**容態** 頭痛、悪心、腹痛、下痢、を訴へ或は眩暈、全身倦怠、消化障害を來す、但し發熱することなし。

本症は普通「アルコール」を飲用したる時の如く、速かに中毒症狀を發起するものにあらず、翌日若しくは翌々日に至り、前記の症狀を發す、失明を來し若しくは虚脱症狀を以つて死するが如きは、比較的少量なる時に限る。

致死量は三〇・〇以上一〇〇・〇なりと曰ふ、「メチールアルコール」は、集積作用あるものにして、彼の普通「アルコール」の如く、飲むに従つて酸化し體



外に排泄せらるゝものにあらず、比較的永く体内に蓄積し中毒を發するなり、  
手當 「モルヒネ」劑を與ふ、勿論醫師の治療を受くべし。

### 三、「フオルマリン」中毒

源因 變敗し易き食料、殊に酒葡萄酒に混入して防腐の目的に使用す。

容態 内用により中毒を來す時は、人事不省、顔面蒼白、全身冷汗、呼吸促進

あり、(日本には中毒例あるを聞かず)

本薬は強烈なる刺激性を有し、加温により發散するのみならず、消毒防腐力強大なり、最も廣く應用せらるゝは器物、衣服、家屋の消毒なり。

手當 對價療法の外なし、臭氣を中和するには「アンモニヤ」を蒸發せしむるを  
良とす。

### 四、炭酸瓦斯中毒

源因 炭酸瓦斯中毒は、炭酸の爲めに新鮮空氣の欠乏するにより發す、動物試

験の結果によれば、炭酸瓦斯のみにては比較的少量ならざれば中毒を來すもの  
にあらず。

鑛坑、醱酵竈、(麴室)井戸、貯藏穴、其の他多人數集合したる劇場學校等に於  
て發す。

容態 胸内苦悶、眩暈、心季亢進、惡心、嘔吐、頭痛、を來し惹て人事不省に陥り、

凡ての反射作用を失ふ。

脈は緩徐續て細小頻數となり、皮膚冷却全身痙攣の下に死す。

手當 患者は速かに新鮮氣中に移し、呼吸を容易ならしむ、薬品としては赤酒  
を與へ、重篤ならば人工呼吸法を施すべし。

### 五、重「クローム」酸中毒

源因 自殺の目的に服用する者多し。

容態 嘔吐下痢、強劇なる腹痛、を發し轉々苦悶す、顔面は蒼白色となり、口唇



四肢は藍紫色を呈し、且つ脈膊微細全身血冷す。

吐物は黄色にして粘液血液を混す、若し本薬を水に溶解して嚥下したる時は、胃粘膜甚だしく糜爛し、腸に降る時は下血を來す。

本患者は多く虚脱を以つて死亡する者にして、少量致死に至らざる者は、胃腸粘膜の加多兒を發す。

手當 速かに嘔吐せしめ、若くは強下劑をなすべし。

## 六、慢性鉛中毒

源因 職業的原因により發すること多し、即ち鑄字工、工夫、俳優、又は含鉛汁器、玩具等なり。

容態 本病は神經筋肉を主として浸す、即ち鉛毒疝痛、關節痛、四肢振顫、痺、視力障害、黄疸、知覺脱失、腎臟炎、神經痛等を發す。

患者は頑固な便秘、口内に鏽性甘味を覺へ口臭を發し、齒齦暗黒色となる。

手當 職業を廢すの外なし。

## 七、殺鼠劑中毒

源因 目下殺鼠劑とし用ひらるゝものは、亞砒酸劑及磷劑なり。

殺鼠劑による中毒は誤用に多く、自殺他殺の目的としては往古盛なりしが現時は少なくなれり。

### (イ) 亞砒酸中毒

容態 劇甚なる嘔吐の後、昏睡、譫妄、痺痺を來し終に心臟及呼吸摩痺により死す。

(ロ) 磷中毒 胃痛嘔吐を來す、此の吐物は暗所に磷光を發す、且つ甚だしき時は吐血或は下痢す、脈は頻數微細となり精神恰かも熱病患者の如し。

手當 磷中毒には速かに嘔吐を促し、炭酸曹達水、又は下劑として大黃末を多量に與ふ。



亞砒酸中毒には促吐の外民間療法なし。

## 八、石炭酸中毒

原因 誤用或は自殺の目的にて飲下す。

容態 口内粘膜は勿論、食道胃腸粘膜腐蝕せられ、患者は灼熱疼痛、嚥下困難を訴へ、次で眩暈視力障害耳鳴を來し、顔面蒼白四肢紫藍色となり、呼吸促進人事不省となる、脈は微細虚脱症状にて死す。

尿は氣中に置く時は暗黒色となり、往々血液を混す。

手當 嘔吐を促し、石灰乳(俵入石灰)を大量に與ふ。

「アルコール」は石炭酸を中和するの効あり、故に皮膚を石炭酸にて腐蝕し、若しくは飲下したる者には、「アルコール」を與へ次で吐出せしむるを良とす。

## 九、昇汞中毒

原因 誤用及謀殺自殺による、近來昇汞を自殺用に供する傾向あり。

容態 粘膜(消化器)腐蝕作用を來すの外、速かに吸収せられて急性胃腸炎の症

狀を來し、患者は嫌ふべき鑛味を覺え、口腔咽頭灼熱腫張し、血性嘔吐を來す

其他混血の下痢ありて虚脱により死亡す。

手當 嘔吐を促し、次で鶏卵牛乳等を與ふべし。

## 十、肉類中毒

原因 肉類の腐敗する時は「プトメイン」なる毒物を生ず、又「ふぐ」の如く固有毒を有するものあり。

最も肉類の中毒を發し易きは夏時なり、「かまぼこ」「はんぺん」の古き者は最も中毒を起し易し。

容態 強き胃腸加多兒の症状を發す、甚だしき時は血便を排泄することあり、即ち嘔心、嘔吐、下痢を來し摩痺することあり、死する時は虚脱に由る。

手當 促吐法を必要とす、次で大黃の如き下劑を多量に與ふべし。



**注意** 宴會配膳等の魚類を食し、就中翌朝之れを攝取して多數の中毒患者を發せし實例年々少からず、故に異臭變味を發し、不安の者は絶対に食すべからず。

## 十一、酸類中毒

**原因** 酸類とは鹽酸、硫酸、硝酸、の類を總稱す此等の酸類は腐蝕作用強烈なるものなり、近來消火器或は工業用として酸類を多く使用するにより、中毒者日に多きを加へつゝあり。

**容態** 接觸局部の腐蝕作用を主とす、即ち局處粘膜炎は溢血して高等の炎症を發す、患者は口内灼熱、煩渴、嚥下困難、嘔吐、疝痛、下痢、を來す。

次で患者は大苦悶をなし、虚脱により死亡す。

**手當** 促吐を第一とす、次で牛乳鶏卵を與へ、又重曹水、生灰末の如き強き「アルカリ」性物を以つて速かに中和せしむべし。

皮膚に作用したる者は火傷を起す、斯る場合に在つては前記「アルカリ」液にて中和し、後油類若しくはイヒチオール軟膏を貼す。

加里滴液の如き、強「アルカリ」性藥品も又中毒を來す、其の作用は酸類と略ぼ同一なり、只手當としては反對に酸類を與ふにあり。

**附記** 以上の外菌類、貝類、有毒植物、の如き中毒の種類は多數なる者なり、要するに古來より有毒物として傳唱せられある者は、決して取食せざるを安全とす。中毒の解毒的措置としては、何れも専門的智識を要するのみならず、民間療法として適當なるもの少なきを遺憾とす、要は胃腸内殘留の者を速かに驅除するを必要とす、催吐法としては咽頭を刺戟す、(指を深く咽頭に挿入す)腸内に下りし者は、大量の下劑を與へ、速かに醫師を迎ふるの外なし。



## 第十一章 繃 帶 術

繃帶とは、布片を以つて創傷及患部を纏絡するを目的とす。

### 繃帶の効用

- 一、患部を被覆して、外來の刺戟を妨ぐ。
- 二、外用藥を保持す。
- 三、傷部を壓迫して、止血作用をなす。
- 四、骨傷脱臼を保定するにあり。

### 一、卷軸帶使用法

右手にて卷軸を堅に、拇指と示指との間に撮み、左手にて帶尾を取り、少しく引き解きて、軸頭の外面を目的とする局部に當て、一所を回轉すること二回乃至三回し、以つて帶尾を固定し始終皮上に接して漸次纏絡し、平等の壓迫を與

へ終端を固定す。

壓迫の程度は強弱其の度に注意すべし、然らざれば繃帶の目的を達すること能はず、反て鬱血疼痛を惹起することあり。

### A 折轉帶

上肢下肢の如く、大小等しからざる部を繃帶するには、普通の纏絡にては、一線は緊に他線は緩に失し、壓定力平等ならず運動すれば弛脱するものなり、故に如此場合には折轉帶を用ふべし、(第一圖)

### B 交叉帶

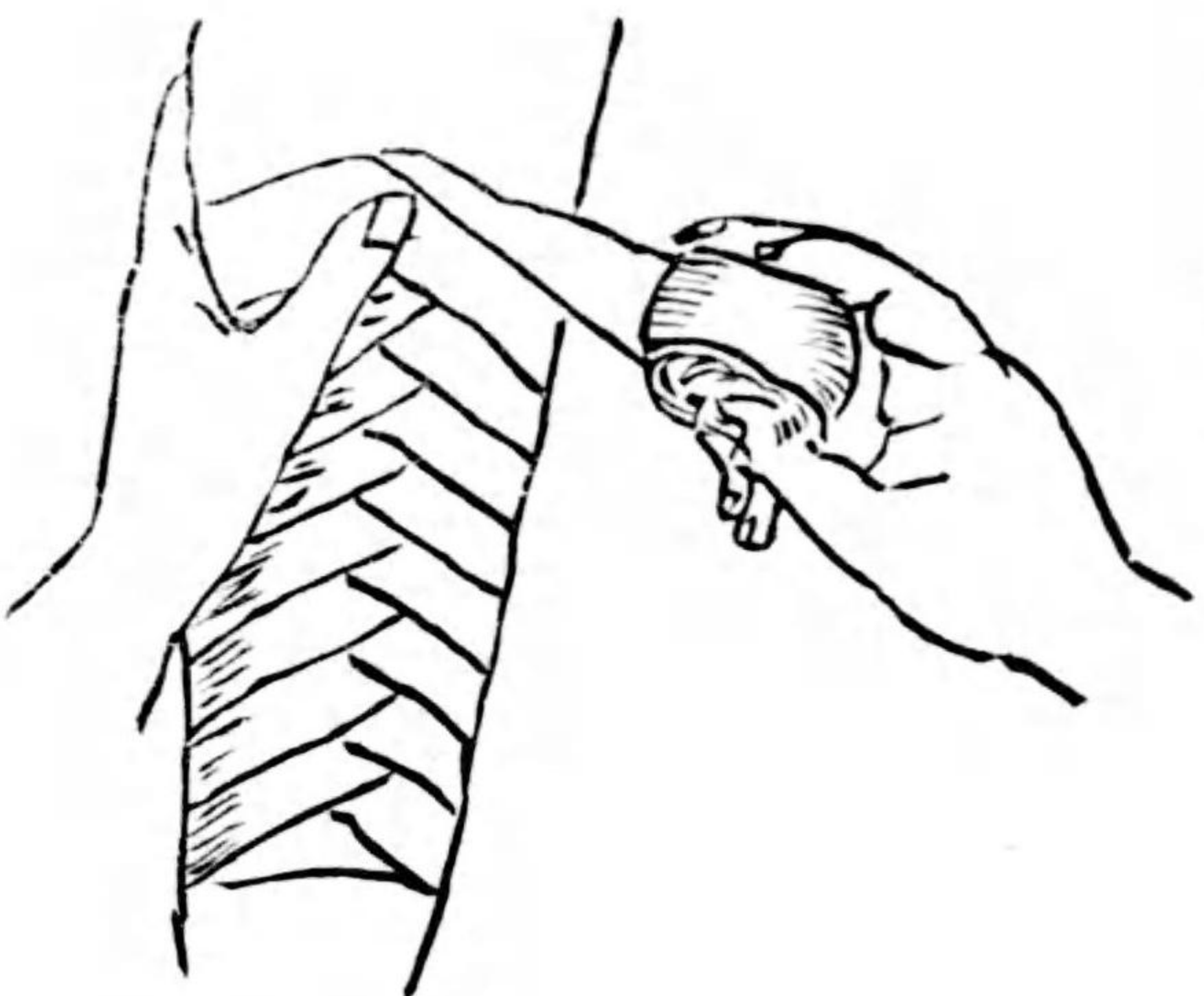
帶の行路8字形をなすにより8字帶とも稱す、又外形龜甲に似たるを以つて龜甲帶の名あり、肘部膝部の如き屈伸をなす部に適當なり、例へば膝に施すには、卷軸帶の一端を膝蓋の稍々下部又は上部に當て、環行せしむること二乃至三回にして斜に股又は下脚に至り纏絡すること一回、更に斜上し次で斜下し、以つて前片と交叉せしむること第二圖の如し。

### C 人字帶

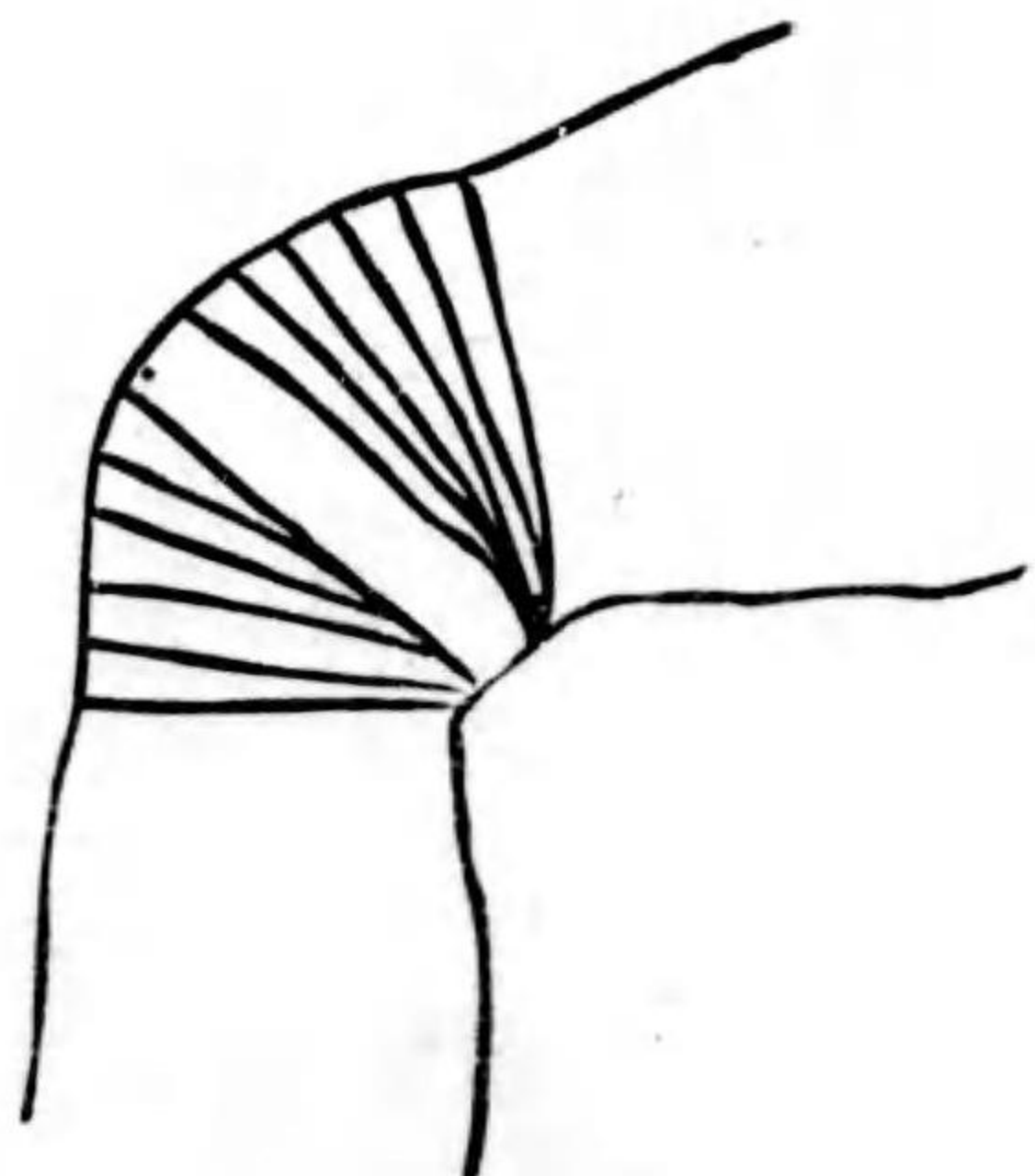
此は肩胛部、鼠蹊部、等に施す繃帶なり、今鼠蹊人字帶を述べ



第一圖折轉帶



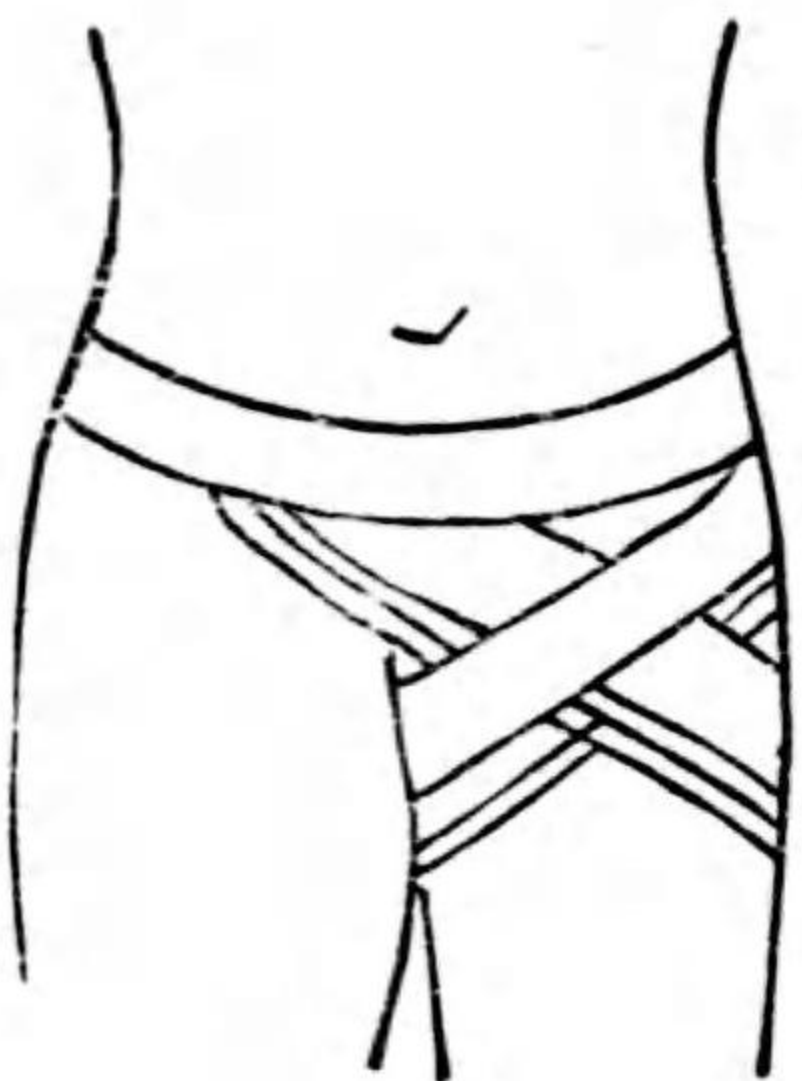
第二圖交叉帶



んに、先づ縛帯の一端を採り、其の始端を健側の腸骨前上棘の下に當て、腰圍

を廻らすこと、二三回、斜に病側の鼠蹊に沿ふて下り、股の内面より後面を繞り、斜に前面を上りて腸骨部に至り、環行帯に従ふて健側に至る、如此なすこと數回反覆す。(第三圖)

第三圖人字帶



第四圖頭部縛帯



第五圖指の人字帶



(説明なし)

D 頭部縛帯

始め頭圍に環行帯を施し、次で反轉する毎に、必ず環行帯を施すこと一回にして固定するにあり、若し脱轉の虞あらば其の環行帯の最後に於て反折して頭の側面を下り、顎下を繞り更に上行して環行帯に達して止む。



(第四圖)(第五圖は圖解に止む)

### E 偏眼帶

#### 第六圖偏眼帶



りて止む。(第六圖)

其他種々術式ありと雖ども、應急手當としては必要なきにより省略す。

### 二、三角巾用法

三角巾繃帶は應急手當法に當り極めて便なり、即ち單に創部を被包して外來の害物を防ぎ、所謂保護繃帶となすに適す、又尖項を下縁に向けて反折し、再三

反覆して適當の廣さとなし卷軸帶に代用すべし。

就中上肢の重創に在つては、卷軸帶又は三角巾を以つて纏包したる後、更に三角巾を用ひて病臂を適當の位置に支持し保定すべし。

其の法圖の如し、(圖解にて了解せらるべきにより説明省略す)

### 頭部四脚帶

長さ四尺巾五寸位の布を取り、其の兩端を分裂して各二脚となし、中央約二寸五分位を残こし用ふ、其の圖解(A)(B)の如し。

### 三、副木繃帶

(後章骨折措置參照)

副木繃帶は、専ら骨折脱臼等に用ふるものにして、患部上下の關節に達する長さある副木を貼し、患部を安定固保するにあり、而して其の方法は元より一様ならず、須らく臨機措置するを要す。

副木は患者を支持固定するに用ふる者にして竹木、「ボール」紙、柳皮、杉皮、家根板の如き物体を以つて製す、而して形大小の如きは部位により各々差あり。





(A)



(B)

三角巾縲帶各種圖解





副木を使用するには、先づ布片若しくは紙片を以つて之れを纏包し、決して患部皮膚に直接せしむべからず、必ずや皮膚と副木との間には「ガーゼ」、脱脂綿花、其の他紙片等を挿みて、柔軟とし過度の壓迫を避くべし、或は副木を貼するに先ち、患部を「ふらんねる」帯にて纏絡するも可なり、又以上の物品なき場合は藁束を用ふるも妙なり。

## 第十二章 外科的疾病

### 外科的疾病各論 (突發し易き者のみを掲ぐ)

#### 一、火傷及湯傷

**源因** 火傷は、火氣火焰又は其の他の熱物により、湯傷とは、熱液又は熱蒸氣により發する損傷なり。

**容態** 便宜上、分ちて三度とす。

第一度(輕度)なるものは、皮膚赤色を呈し疼痛あり、軽く腫脹す。  
第二度(中等度)は第一度に加ふるに、水疱を形成するものを云ふ。  
第三度(重症)は炭化即ち、皮膚筋肉迄黒色に變ずるものを曰ふ。  
火傷及湯傷は、一手一足なるときは多くは全治するも、全身三分一以上を冒されたるものは、死亡すること多し。

**手當** 一、水疱は之れを破らず、消毒したる針の類にて疱液を漏出せしめ、「イ

ヒチオール」軟膏を貼す

或は油類を浸したる「ガーゼ」にて、軽く保護す。

内服料としては、温湯牛乳茶等を與ふ。

二、人を火中より救助せんとする時は、先づ自己の衣服を水にて濕ほし、頭及頸に濕布を纏ひ、後火中に突進すべし、而して呼吸は可成爲さるを要す、強き火煙を吸入する時は、忽ち卒倒すればなり。



三、火傷者の衣服燃ひつゝあるときは、速かに且つ靜に、地上に倒し適當なる物を覆ひて火を滅滅し、次で水を灌ぎて冷やし、然る後脱衣せしむ。

四、火傷患者は第一に疼痛を緩解せしめざるべからず、即ち火傷せる部分に空氣を接觸せしめざる爲め、衣服布片類にて包むべし。

注意 石油による火傷ならば水を注がず、石灰及木灰「メリケン粉」其の他適當なる粉末類を撒布し、消火せしむべし。

火傷者は狂奔せしむべからず、或は消火の爲め揉み消す時は傷部を糜亂せしむる故注意すべし。

## 二、凍傷

原因 久しく寒冷に冒さるゝ時は本症を發す。

容態 冒されたる皮膚、先づ發赤疼痛を發し、次に硬固白色となり知覺を失し、(摩痺)次で黒色となり、終に局部の死敗を來す。

小兒の耳翼及指等は最も冒され易し、(軽度の者は俗に霜やけど云ふ)

手當 一、初期に在つては局部に疼痛赤班を來す、此の時は冷水に浸したる綿花を以つて、軽く摩擦し血行を促すべし。

二、局部冷却し鉛色を呈しなば、注意して徐々に温め安靜に保温すべし。

三、一部枯死し黒色とならば、「グリセリン」に浸したる「ガーゼ」を貼し繃帶すべし。

四、軽度の凍傷は、單軟膏を擦入する時は、豫防となり又治療し得べし、「イヒチオール」軟膏ならば最も可なり。

凍死者蘇生法 一、徐々に凍死者の身體を温暖ならしむべし、若しも即時に暖室内に移す時は死することあり、故に注意して二、凍死者を閉鎖せる寒冷室内に移し、凍固せる四肢を破折せざる様衣服を截り去り、次で三、雪ある時は之れを以つて全身を適度に摩擦し、雪なき時は患者を寒冷なる濕布を以つて摩



擦し、四肢屈曲し得るに及び、**四、人工呼吸法**を行ふべし。

**五、自發呼吸運動發現**し來らば、患者を適度に温めたる室内に移し、軽く冷かなる蒲團をかけ濕りたる布片を以つて、徐々に全身摩擦を行ひ、且つ室内を温暖ならしむべし。

**六、次に「ホフマン」氏液吸入**或は内服なきしめ、日本酒赤酒の如きを與へ神識の挽回を企つべし。

**豫防法** **一、**飲酒は凍傷に罹り易し。**二、**脂肪に富める食物は防寒に効あり。

**三、**空腹は反て凍傷に罹り易し。**四、**盛に運動をなすべし、睡氣を催すは凍死の前徴なり決して睡るべからず。**五、**顔面手指耳翼等は速かに摩擦すべし。

### 三、電撃

**源因** 雷或は高壓電線に接觸して發す。

**容態** 電撃による損傷は輕重一樣ならずと雖ごも、失神する者多し。

最も劇烈なる時は即死す、或は速かに虚脱して無意識(人事不省)となる、身體は多く火傷を蒙り割裂せらるゝことあり、又は一傷なく危篤症狀に陥るものあり。

近來高壓電線に觸れ、若しくは自殺の爲め電線に懸垂し、或は殺人の用に供したる者あり、將來吾邦に於ける電氣事業は益々旺盛となるべきにより、國民一般に電氣に對する危險防避の智識なかるべからず。

**手當** **一、**患者には赤酒温湯の如きを與へ、**二、**腹部を芥子泥を貼し、又は**三、「フランネル」**を巻きて全身を保温すべし、人事不省の者は、**四、**人工呼吸法を行ひ、**五、**傷部は繃帶す(人工呼吸法の如く長時行はざるべからず)

### 四、創傷

**源因** **(イ)**銳器により傷く時は、之れを切創と曰ひ。

**(ロ)**刺されたる時は、之れを刺創と云ひ。



容態

- (ハ) 皮膚及組織の破れたる時は、之れを裂創と云ひ。
- (ニ) 皮膚及組織と共に壓碎挫滅せられたるものは、之れを挫創と曰ふ。
- (イ) 切創は創縁離開す。

(ロ) 刺創は創縁離開せず、創底比較的深し。

(ハ) 裂創は創縁不正形をなし、離断せざる纖維を以つて橋を架す。

(ニ) 挫創は不規律に組織挫滅せらる。

手當

一、創傷清潔ならば、其のまゝ清潔なる「ガーゼ」にて掩ひ繃帯すべし。

二、土砂其の他不潔物あらば、之れを除き、次で消毒「ガーゼ」にて繃帯すべし。猥りに防腐薬を撒布し、又は膏薬を貼する時は反而治療を妨ぐるこゝろあり。

三、輕微なる創傷は、石炭酸水、昇汞水、「アルコール」水、を以て清拭し後硼酸末、「デルマトール」、を散布し時としては絆創膏、「イヒチオール」軟膏等を貼し、

繃帯すべし。

四、大なる創傷は止血を急務とす(止血法参照)

創傷は不潔ならしむる時は直ちに化膿するにより、不潔なる繃帯材料を使用すべからず、又不潔(未消毒)なる指を以つて創傷に接觸すべからず。

五、挫創は五十倍石炭酸水、若しくは3%硼酸水等にて、濕布繃帯を施す。

六、擦過傷の如きは「イヒチオール」軟膏を貼し、若しくは絆創膏を貼すべし。

注意 古釘、木竹片、等を土砂と共に刺す(刺創)時は、速かに拔去し、場合によりては創口を切り開き、消毒したる「ガーゼ」を挿入し、決して創口を閉鎖すべからず、(開放創口とす)然らざれば破傷風菌の繁殖を助け、破傷風に罹ることあり、故に時としては豫防の爲め、破傷風血清を注射せば最も安全なり。(血清二・〇乃至三・〇にて可なり)

五、銃創

銃丸による創傷にして、近距離發射の彈丸程損傷力大なり。

外科的 疾病

(九三)



容態 銃創は彈丸の射入により射出には大なり、銃創の危険は血管損傷による大出血、及び貴要中樞神經の損傷なり。

手當 一、止血法を第一とす、(止血法参照)二、骨傷ある時は副木繃帯を施し、創口には清潔なる繃帯を施すべし。

## 六、動靜脈管の出血及止血法

(イ) 靜脈管の出血 靜脈血管の損傷は、暗赤色の出血ありて凝固性弱し、併し血液迸出せざるを以つて之れを知るを得べし。

止血法 一、小出血は血管自個の收縮により、自然的に止血すべし、二、若し大血管なる時は、未稍部の血管經路を壓迫し、三、又は緊縛するか、四、或は強固に繃帯すべし、例へば前膊の出血ならば、手腕關節方面を緊縛し、大腿出血ならば下腿を緊縛するが如し、之れ靜脈血は還流血液なればなり、(單に靜脈血管のみ損傷することは比較的少なく、多く動脈管損傷を伴

ふこと多し。)

(ロ) 動脈出血 動脈血は鮮紅色にして凝固性強く、且つ線狀に迸出するを以つて知るべし。

止血法 一、動脈血の凝固性強きは止血上利益なるものにして、小血管出血の如きは、血管壁自己の收縮力と凝血による栓塞作用とにより、自然的止血をなす。

二、或は硼酸末「デルマトール」の如き粉末を多量に撒布し、「ガーゼ」を厚く當て、壓迫繃帯を施す時は、容易に止血するものなり。

其の一、大血管よりの出血は危険なり 一、斯る時は最も敏速に中樞部(例へば前膊部の出血ならば上膊)を緊縛し、二、尙ほ止血せざるときは中樞血管の徑路上に、小木片小石の類を、「ガーゼ」又は脫脂綿にて包み之れを枕子として載せ、壓定繃帯を施すべし。



或は又第一圖の如く、手拭「ハンカチーフ」三角巾の類にて軽く中樞血管部を縛し、小押を以つて捻轉緊縮するも可なり。



出血部

其二、指壓による止血法

指より出血する時は、(第一圖)指根の兩側に拇指と示指とを當て強く撮むべし、(血管の系路特に出血する脈管を知るには、先づ推定局部を強壓し出血減少するか、若しくは全く止血するを見れば其の部を緊縛しすべし、之れ出血々々の徑路なり)



圖二第

其の三、前膊より出血するときは(第三圖)上膊内側の淺き筋間溝に、四指を後或は前より廻して握

圖三第



其の四、上膊或は腋窩より出血する時は(第四圖)頸の下、鎖骨の上部凹所に拇指端を當て、深く内下方に向ひ壓すべし。

其の五、口の近傍より出血する時は

(第五圖)下顎骨隅角の少しく前を骨に向ひ強壓すべし。

其の六、下肢より出血する時は(第六圖)

鼠蹊の中央に兩拇指を當て強く壓すべし。或は又第一圖の如くすべし。(必要多し)

圖四第





圖五第



其の七、鼠蹊及其の附近より出血する時は、手拳を以つて腹部臍の下方に於て腹部大動脈を脊柱に向つて強壓すべし。

其の八、弾力帯に因る止血法 指壓止血法は、患者の運搬長時の止血に不便あり、故に弾力帯を用ひて止血すべし、前に説明せし第一止血法之れなり、殊に彈力

圖六第



帶は最も止血に便利なり、即ち「ズボンツリ」、大なる「ゴム管」、白轉車の「チューブ」、「タイヤヤ」、革帶の類を良とす。

注意 一、止血せざる傷者に、運

動を爲さしむべからず。

- 二、止血せば擔架にて運搬するか、脊負時は最も靜かなるべし。
- 三、出血部は軀幹(心臟部)より高からしむべし、但し頭蓋部の出血なる時は、腦貧血を防ぐ爲め水平に仰臥せしむべし。
- 四、凝血にて止血せば、強ひて剝離すべからず。
- 五、大出血者は頻りに口渴を訴ふるも大量の水を一時に與ふべからず、食鹽水を少量づゝ頻回に與ふべし。
- 六、大負傷者は勇氣を鼓舞せしむべし、例へば小損傷なり落膽すべからずしつかりせよと元氣を附するにあり、心得なき者は大負傷なり、大出血なり、誰々は何々にて死せり、なぞ些しも患者の心情を慮からざる者あり、注意すべきことなり。

## 七、異物摘出法

外科的 疾病



**(イ) 耳内の異物**

耳垢<sup>みみあか</sup>、昆蟲、豆類、石筆、を押入すること多し、異物は一、

「ピンセット」を以つて摘出するか、二、又洗耳流出せしむ、昆蟲の如きは耳内に於て運動し、患者恐怖卒倒することあり、斯る場合には、三、速かに「グリセリン」又は油類を多量に滴入し、以つて彼れの運動力を防止すべし。

豆類の如きは、水分を送る時は膨満し倍々摘出困難となるにより、「ピンセット」又は「とりもち」にて、粘着摘出を試むべし。

耳垢の乾固し聽力を碍するものは、前日「オレーフ」油「グリセリン」の類を滴加して柔軟ならしめ、後注意して「ピンセット」にて摘出するか、又は洗耳すべし。洗耳を數回反覆する時は、眩暈を來す注意すべし、又洗滌水は3%硼酸微溫水を用ふべし。

**(ロ) 眼内異物**

石炭殻の粉末塵埃昆蟲等なり、之れを摘出するには眼瞼を翻轉して異物を認む、若し認め得ざる時は、硼酸水を以つて洗眼し、次で「コカイ

ン」水を點眼すべし。

無闇に「こする」者あり不可なり、斯くする時は充血を來し、或は異物の爲め眼球を傷くることあり。

**(ハ) 鼻腔内異物**

豆類を多しとす、斯るときは先づ口を閉ぢて努責せしめ、若し能はざる時は、「ピンセット」を以つて注意し撮出すべし。

**(ニ) 異物嚥下**

嚥下し得るものは、一般に排泄せらるゝを例とす、例へば銅貨、石筆、硝子、棒、針類なり時としては異物長く腸内に止まり下痢に苦しむことあり。

義齒の嚥下は危険なり、何んとなれば鈎あるにより、粘膜を傷け、若しくは粘膜を貫通して通下せざることあり、要するに異物を嚥下したる時は、甘薯の類を與へて包裡せしむべし、猥りに腹部を按摩し、下劑を投ずるが如きは有害なり。



(八) 毒虫類の咬刺螫

- 一 百足蟲 百足蟲は口にて咬む、咬部若し手足ならば中樞部を緊縛し、「アンモニヤ」水を滴加し、又は酢にて濕布繃帯を施すべし。(はぶ草汁又可なり)
- 二 蜂刺 「アンモニヤ」水を塗布し、若しくは酢にて濕布繃帯を行ふ、民間にては里芋の莖汁くきしるを採り塗る時は疼痛を緩解すと謂ふ。(はぶ草汁最も可なり)
- 三 蛇咬傷 内地にては蝮蛇まむしを多しとす、毒蛇の咬傷は生命の危険あり。局部は痺痺、腫脹、暗紫色を呈し、全身搖蕩びんくを來すことあり。
- 手當 迅速に毒物の吸収を防ぐべし、即ち一、中樞部の緊縛、二、亂切、三、瀉血、四、吸引、等を施こし次で「アンモニヤ」水の濕布繃帯又は「はぶ草汁」を滴加す。

(はぶ草は凡ての毒虫刺刺に効あり、家庭に於て常備するを要す)

(九) 犬の咬傷 狂犬と否とを問はず、傷部を亂切して瀉血するを可とす、或

は橙汁を滴加し、又は烙鐵、腐蝕藥、にて腐蝕すべし、狂犬と決定せば豫防注射を施こさるべからず。

十、骨折

源因 打撲墜落の如き、暴方により發す。

骨折に三種あり、一、單骨折、二、複雑骨折、三、粉碎骨折、之れなり

一、單骨折とは出血なく、又皮膚に損傷なし。

二、複雑骨折とは、同時に皮膚筋肉に、損傷を伴ふものを云ふ。

三、粉碎骨折とは、一骨の二個以上に粉碎せられしものを云ふ。

容態 骨折を來す時は、劇痛ありて運動廢絶す、若し他動的に運動せしむる時は、骨端の軋礫音を聞くべし、又骨折部を壓する時は劇痛を發す。

手當 骨折を措置するには、先づ被服を除き傷肢を擡くるには、骨折の上下端を支持し徐々に引きつゝ擧ぐべし、粗暴に扱ふ時は骨端益々齟齬そごし、血管神經



を傷く然らざるも疼痛を増すべし。

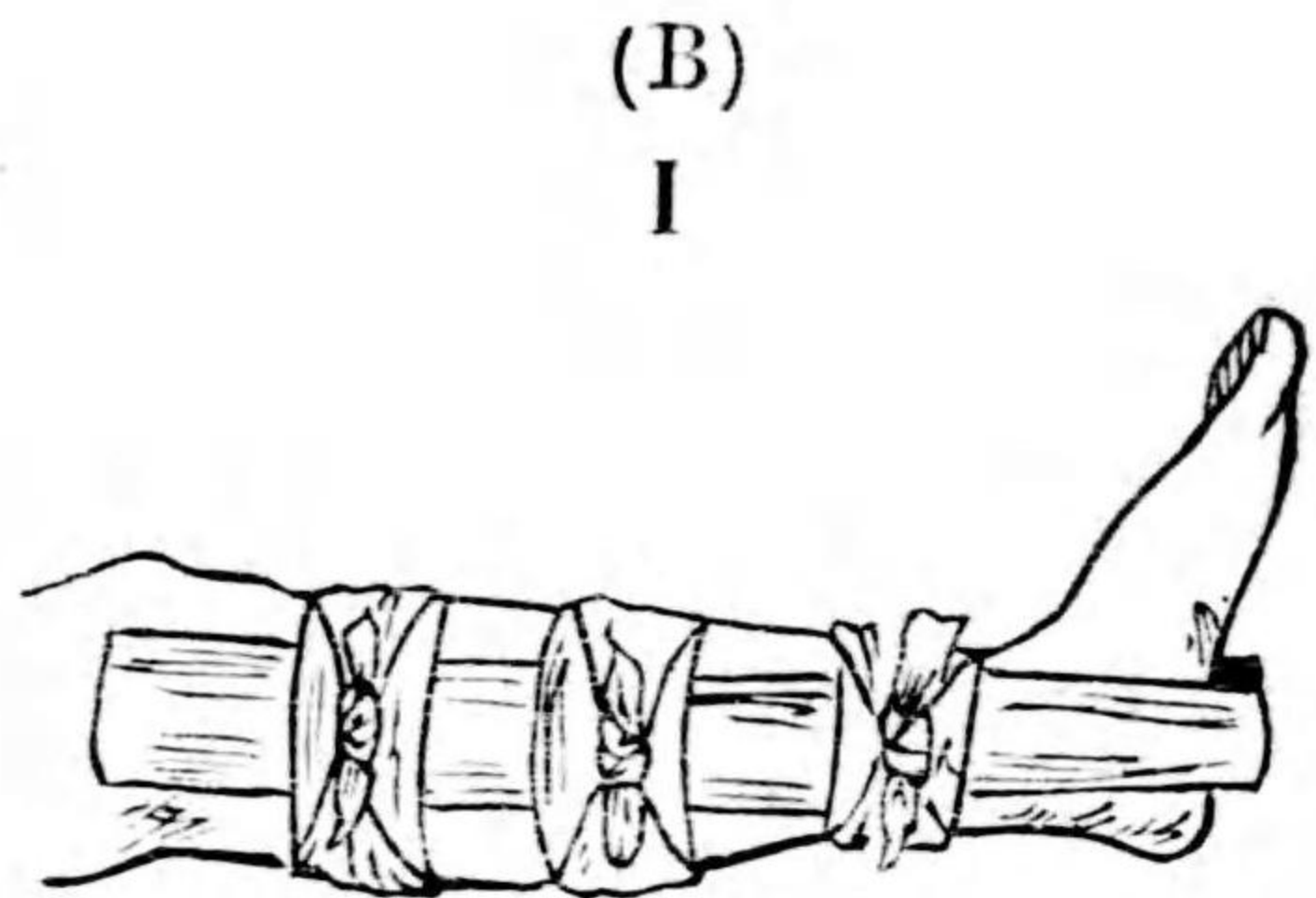
適當なる繃帶準備なき時は、一時救急繃帶を施すべし、則ち上膊骨、或は前膊骨折ならば、簾の類にて巻き、或は柔きものを當てたる上に、内側には短き、外側には長き、竹木薄板(家根板の如し)をあて、括り、肘を直角に曲げ、胸の前面に吊して支へ、又は健側の手にて支へしむべし、(A) I II 圖の如し。

大腿骨、或は下腿骨折ならば、一、單に藁束或は捲きたる外套を、大腿内側の中央より、其の内側に沿ひ足蹠にて折り曲げ、他端を大腿中央の外側に達せしめ、膝の上下にて括り患脚全部を健肢と共に結び付けて支ふべし、(B) I II 或は又、二、軟き物を當てたる上に、下肢の内側に大腿の中央に達する棒或は板類をあて、外側に腰に達する棒の類をあて括るも可なり。

### 一、脱臼

脱臼とは、骨頭の關節面外に脱出するを云ふ。

骨折處置圖解



(B) I

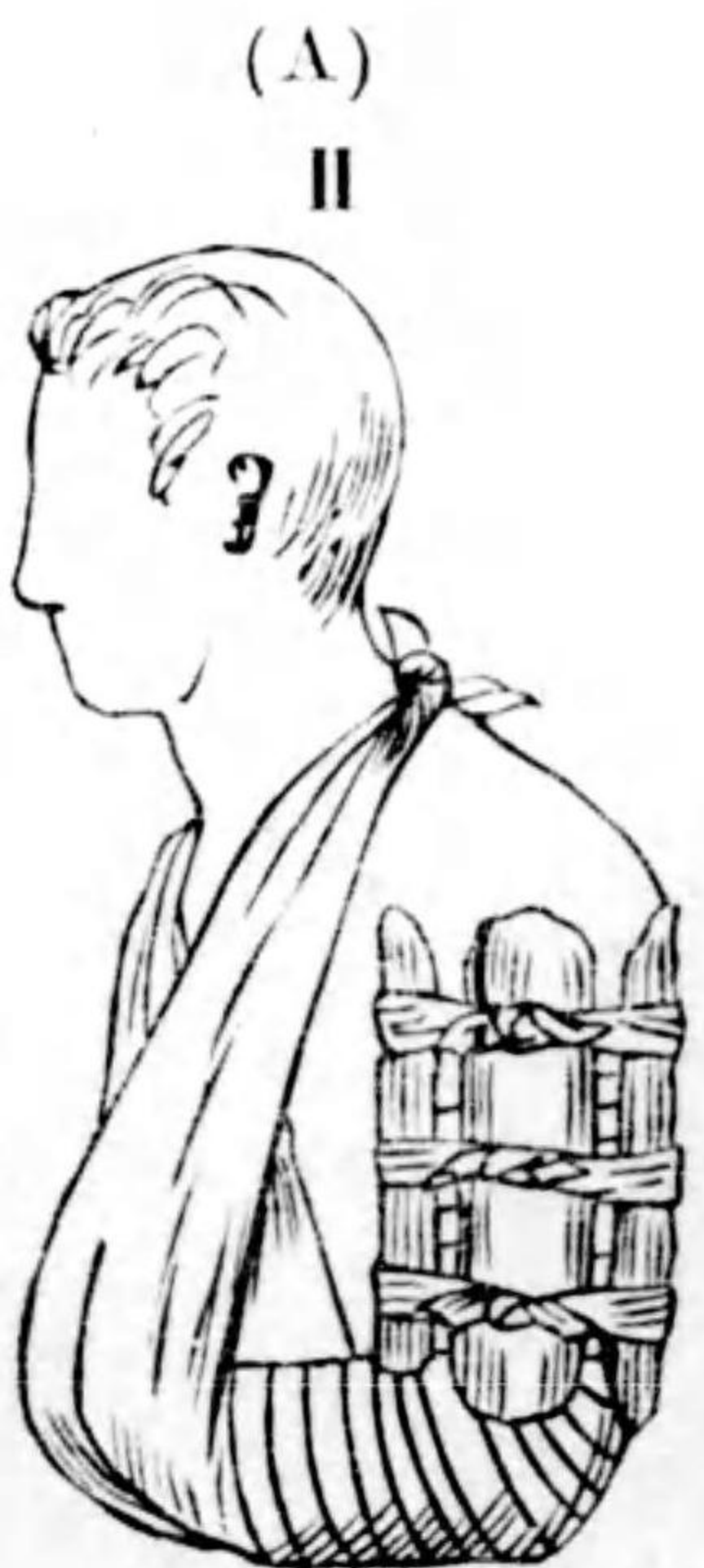


(B) II





(A) I



(A) II

### 源因

關節の變形を來す、例へば肩胛脱臼なる時は、關節の外面扁平となり、股關節脱臼の時は、臀部に骨頭の突出するを見る。

脱臼を、來す時は、全く關節運動をなすこと能はず、他動的に運動せしめんとすれば、疼痛を訴ふ。

手當 速かに脱臼したる手足を、固定維持する爲め、繃帯を施こし専門醫に送致すべし。

### 十二、捻挫

捻挫は逆運動を爲すことにより發す、捻挫する時は筋肉(腱)靱帯の伸展、或は裂傷を起し、其の部分腫張疼痛を來す。

手當 濕布繃帯を施こし、「ヨート」丁幾或は、「イヒチオール」軟膏を塗布し、後固定繃帯を施こし、絶対に運動を禁ずべし。



大正三年九月一日印刷  
大正三年九月五日發行

不許  
複製

應急手當法奧付

\*\*\*\*\*  
定價金四拾錢  
\*\*\*\*\*

著者兼  
發行所

戶所龜作

埼玉縣北足立郡浦和町百拾番地

印刷人

清水武藏

埼玉縣北足立郡浦和町百八拾番地

印刷所

清水活版所

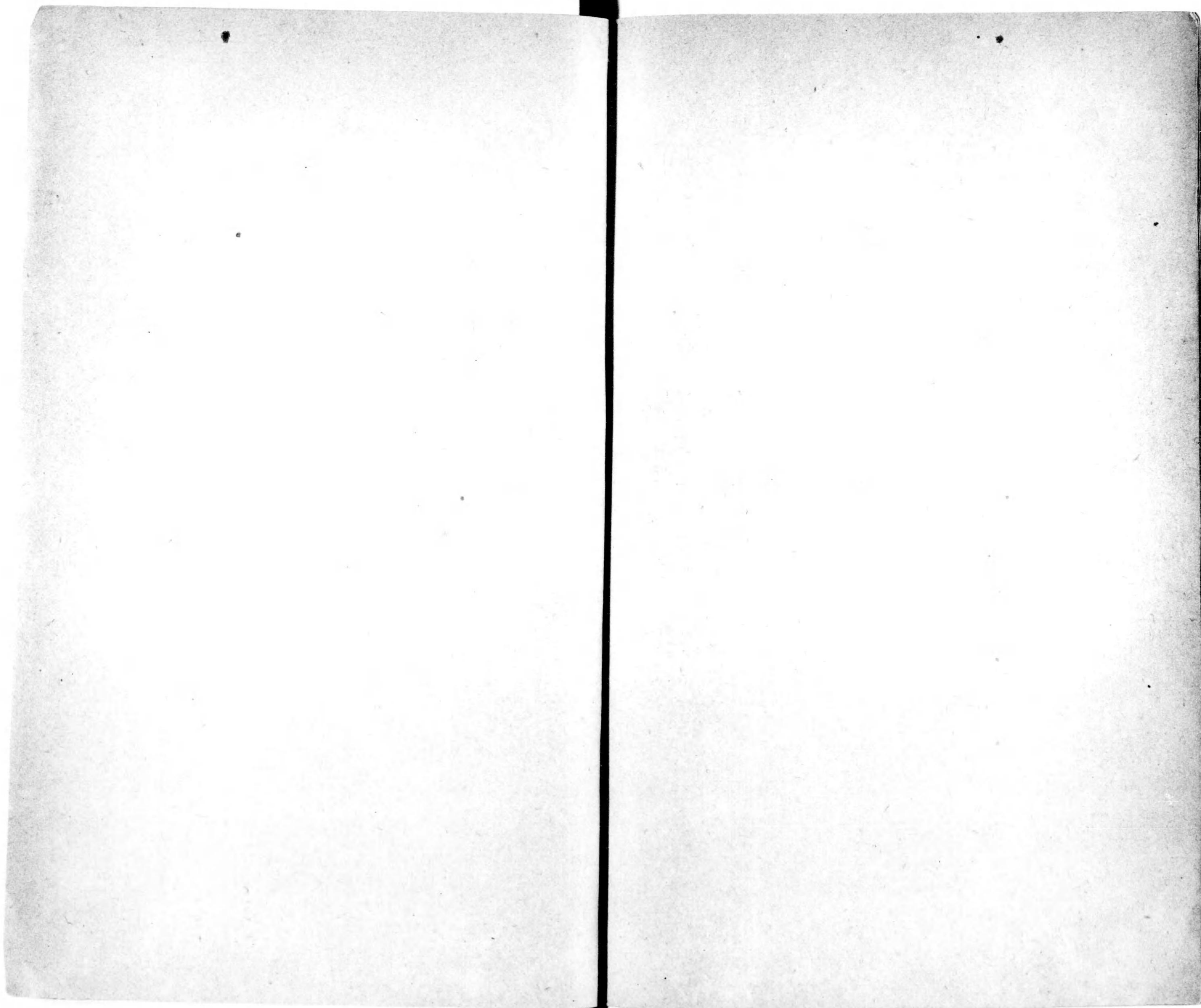
埼玉縣北足立郡浦和町二千百九番地

埼玉縣北足立郡浦和町四百五十四番地

發行所  
須原書店

電話浦和五五番  
振替東京九九〇〇番







270  
624



終

